

[研究報告] 1995 年 9 月

子供と環境  
—子供の遊び場の創生にむけて—

財団法人ハイレイフ研究所

## 主旨

子どもと環境については、ややもすると既成の観念に従って考えがちである。今回の研究主旨はなるべく先入観にとらわれず、世界に視野を広げて来るべき世紀に生きる子どもたちが、新しい環境のなかでより生命力あふれる形でダイナミックに未来をひらいていける想像力を身につけるためのよりマクロな環境を考えていくことである。そのためには空間的には広く国際的なポイントを強調し、時間的には過去にまでさかのぼって、考えられる環境のあり方をシュミレーションしようとするものである。

最初の報告は、総論として子どもの遊び場創世へむけて、子どものパークに関して先進国と言われている国々におけるパークを分析し、日本の現状と比較してみたものである。そのなかから確実に未来のパークのあり方が見えてくるはずである。

2番目の報告はフランスにおける過去の庭園の歴史を振り返りながら今日の庭園をめぐる問題点をあらい出したものである。

3番目の報告はパリにある美術館やパークを検討しながらより芸術的創造空間をひろげる試みを行なう。

最後の報告は今日の庭園の世界的な傾向をパノラマ的に整理した発表である。

---

総括報告 — 子どもの遊び場の創世へむけて

報 告 — ロワール湖畔の庭園（石田和男）

報 告 — 創造弾力の世界（荒 智子）

報 告 — パーク・パノラマ（ジャン＝ポール・ピジャ）

## 研究者

### 石田和男

パリ第4大学留学、中央大学哲学科卒業。

主にフランス現代哲学専攻。その後、日本ブリタニカ社編集部にて「ブリタニカ叢書」の刊行に携わる。同社にいる時からプロデュースに関心を持ち、「国際児童演劇祭」「国際メルヘン演劇祭」「TOKYO TODAY展」(ロンドン)「JAPON' 83」(パリ)のプロデュースを行なう。93年より法政大学第一教養部で教鞭をとる傍ら、著作、翻訳、プロデュースの活動を行なっている。

著書：「転生する言説」、「プロデューサー感覚」

訳書：「世紀末の他者たち」(ジャン・ボードリヤール)

「無の贈与」(ジャン・ドゥビニョー)他。

### 荒 智子

幼い時からクラシックバレエを学び、バレリーナを目指す。高校卒業後渡米しビジネス英語、コンピュータなどを学ぶ。帰国後、イベントの司会などをする傍ら、プロデュースの仕事に携わる。

「サンシャイン・オールブランドサマーコレクション」、「マリア・カラス」(フランス)

「ファッションショー」(中国)など様々な国際的なイベントに携わる。また、児童図書の編集・著書活動も始める。「子供環境百科」(全5巻)編集委員。

写真家としての実績も最近増えている。雑誌「ユリイカ」青土社、「世紀末を語る」(吉本隆明他)紀伊國屋書店、他。

### ジャン＝ポール・ピジャ

パリコンセルバトワール ピアノ科卒業。

その後、法律を学ぶ。テレビ局TF1に勤め、エリック・ローメルやルイ・マルと映画を撮る。そして、ボンビドゥ・センターの産業文化センターイベントプロデューサーとして様々な展覧会を企画。その成果はやがてヴィレツト公園にも生かされる。15年以上活躍した後、91年より毎年ロワール河畔のショーモン城にて国際庭園フェスティバルをプロデュースし、現在にいたる。

雑誌「ヴォーグデコレーション」にレギュラーページを持つ。

総括報告

子供の遊び場の創世へむけて

## 子供の遊び場の創生へむけて

自動車交通は私たちの都市の秩序を妨げ、その結果子供のための遊び場は限定され、危険なものになってしまった。

団地には緑が取り込まれているが、そこには裏庭がもっていた遊び場、昔から寺や神社がもっていた遊び場としての魅力はそこなわれていった。これらの場所に申しわけ程度にもうけられた砂場は、子供の想像力において失われた損失を欠して埋あわすことはできない。

ところがそうやって狭い場所へ追いやられた子供たちが街路を遊び場として選ぶことをやめていない。増加する自動車や人の流れによって、もはや遊び場としての適確性は低くなっている。家庭という場も大人たちが十分に子供たちの想像力の源泉になるものを与えられずにいる。



家庭の生活はそこが拠点となる場ではなく、むしろ鳥の巣のようなベッタウンでしかなくなっている。子供たちの広義の遊び場は根本からそこなわれてしまっているのである。旧来都市では街路は歩行者の物であった。そこでは子供たちは車や人の波に邪魔されずに動くことができる場所であった。

公共的に作られた遊び場などは贅沢なものであった。江戸時代まで都市には子供の遊び場などは特定されて存在しなかった。それほど遊び場に満ち満ちていたのである。それが東京という近代都市に変化することによって、彼らのテリトリーはことごとく大人によって奪われてゆき、彼らの場所は大人たちが使わない空き地、川辺、裏山、山の斜面、寺、神社、海辺、学校などに追いやられていった。

子供たちの想像空間の源である遊び場は空間としてせばめられただけではないのだ。子供たちの生活時間も大人たちによって管理されるようになり、学校、塾、稽古、などに通う彼らは自らの時間をも奪い取られてしまっているのである。

今や時間、空間を奪われた幼い天使たちはその遊び場を小さな機械のなかに映し出されるスクリーンの中に求めている。そこにはもはや力いっぱい、土や水をぶつけ合う本当の遊び仲間の姿はない。ただただ彼らの指先の操作で呼び出される擬似的な仲間が、彼らのかわりに冒険や戦いを代行してくれるだけだ。彼らの想像力の助けをかりてその画面の推移

を一部予測しながら展開させてゆく。そこにはもはや他者の姿はない。画面に対峙する孤独な自己の姿だけが映し出されるだけである。

近代的な都市の発展が子供の遊び場の疎外をもたらしている。彼らの想像空間が狭められることによって、彼ら自信も何らかの窮屈さを感じ、それに耐えられない子供が抵抗を示しているのだ。少年犯罪の凶暴化。校内暴力の慢性化。登校拒否。子供の自殺。例え外部へ積極的に反応しない子供たちでもその批判的な視点は消極的な形で表現される。それは将来に対する漠然とした不安、無力感から生じる特別何かを自分からしようと思わない態度、それが彼らの最後の抵抗の砦となっている。これらの兆候の原因を全て遊び場の喪失に求めることはできまい。しかしそれが一因であることは明らかである。

私たちの豊さを求める生活、便利さを追求する生活はいつのまにか、人生において持続的に育まなければならない楽しさや喜びを排除してしまったのである。子供たちは大人たちの生活のなかにそれが失われていると感じ、生活の場所とは全く異なる〈場所〉。彼らは場所と呼ぶことのできない〈非＝場所〉、中世の避難所＝アジールで擬似的な遊びを行なっているのだ。

最近では大人たちもそのことに気づき始め、解決方法を模索し始めている。しかし、あまりにも急激に一つの方向に進んできてしまったために、どこから変えていったらいいのかわからないのが現状である。テーマパークやディズニーランドの一時的な成功は、あくまでも処方箋的な療法にすぎないのであって、それを行なっておればよいと考えるのはそれもまた大人たちのおしつけにすぎない。子供たちが自分の生活の場で見出だす遊び場は単に人工的な遊び場は意味するものではない。地域の環境全体が彼らの成長をやさしく育むだけの用意ができるかということである。その実現は一朝一夕には不可能である。私たちはまだ理想的な遊び場を創出するための決定的なビジョンを持つにいたっていない。なぜならそれを持つまでには全ての事柄に関して改革のビジョンを特たなければならないからである。今、私たちはその方向へ向けてやっと一歩ふみ出そうとしているのである。

## 遊び場の環境 — 欧米において —

子供の遊び場を考える時、まず頭に浮かぶのがその遊び場の置かれている環境である。都市にくらす子供たちはそ住まいの成り立ちによって遊ぶ空間を大きく限定される。先進諸国における調査によれば低層建物に住む子供の方が高層建物に住む子供より、より多くの時間を遊びにさいていることが明らかになっている。都会の子供たちは屋外へのアクセスを制限されている。それ以来それらの国々では公共的な建物はできるだけ低く建てられるようになっていく。子供の想像力に何らかの影響があることを考慮してのことである。環境の損失が最も悲惨な影響を及ぼすのも幼児期においてである。

彼らは自分たちの住空間と外部の空間とを自由に行き来する生長につれその範囲を広げてゆくのである。

子供たちがくらす環境には様々なものがある。彼らは自分の自由意志で住居場を選んでいるわけではない。彼らが住んでいる空間のまわりの環境によって、遊び場のかたちが変わってゆく。

日本の公園の特徴を考える上で重要なのが、都心近くに個人庭園があることである。都心のなかに平屋立てを持ち、庭園を構えて満足するという生活は欧米にはない。欧米では建物は都市計画法で階数を決められ、区画は整然とし建物の増減は考えられない。

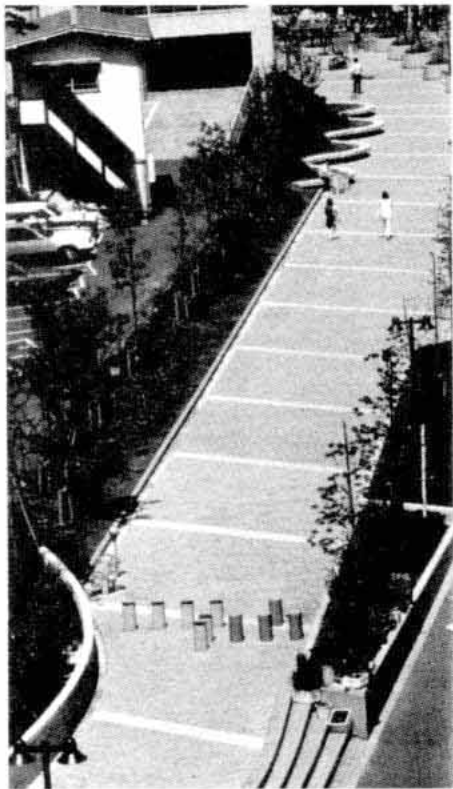
一方、日本では都市に公園が増加すれば庭園は減少していった。また個人の庭園は都市化がすすみビルに変更するにつれ消失していった。

もともと市民が欧米のように公園を要求する心理がうすく、そこに求めるものが具体的でない場合はどの位の広さと、何があれば満足するかということが曖昧である。であるから現在ある公園も厳密に言えば公園の定義にかならずしも入らないものがある。



ウォーターフロントの公園

日本における遊び場のイメージは裏山、川べり、海岸、道、社寺の境内ということになっていた。最近ではそれすらなくなりつつあるので、子供たちは遊び場からますます遠くなってしまふ。

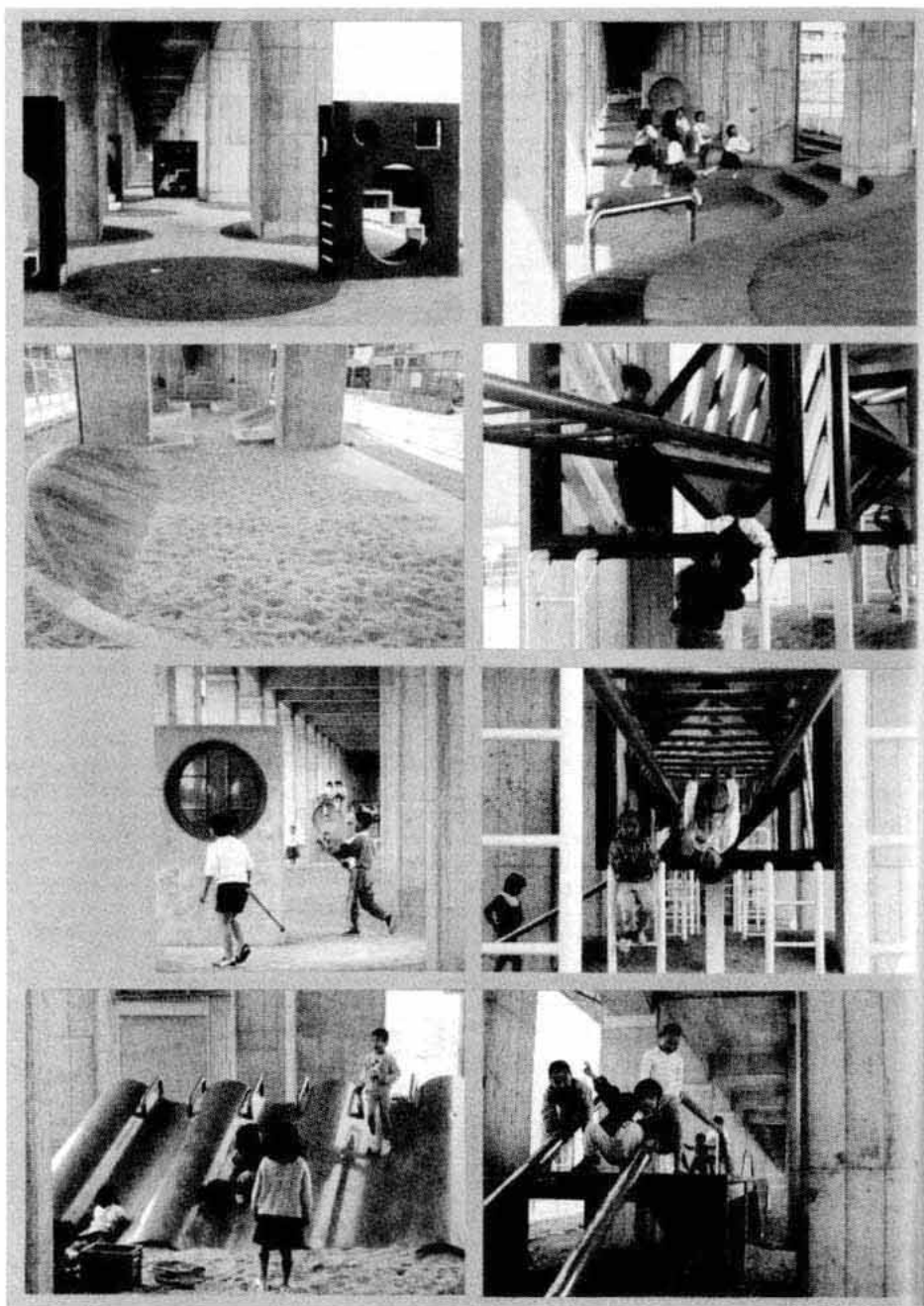


旧玉川上水の遊び場

つまり彼らは日常生活と離れた場所に遊びを求めなくてはならなくなっている。それらの遊び場はアクセスが悪く、遊具もメカニカルで暖かみに欠ける。都心に手軽な遊び場がないので、子供たちの要求にせがまれて大人たちは遊技施設にでかけるようになる。それらは値段が高く、人も多いので子供が気軽に遊べるようにはできていない。

欧米ではこれらの施設に人が入らないのは、そんなことをしなくても都心にいくらでも子供の遊び場があるからである。

日本では子供の生活する地域にどんな小さなスペースでもよいから子供が気軽に遊べる公園が増えなくてはなるまい。



ハイウェイ下の遊び場

## 新住宅地の遊び場 — 欧米において —

すでに先進諸国では1950年から、子供の遊びを考慮した集合住宅が作られている。建物は低層でせいぜい5階までで、それらの回りを広くとり囲んだ遊び場や緑地が、機能性を十分に配慮した上でもうけられている。



スウェーデンのバロンバカルナでは建物によって囲まれた内庭的空間が子供たちを保護し安全な環境を作ることに成功している。マルグバーゲンでは住宅と学校、ショッピングセンターが中心に集中し、道はいたるところが遊び場（プレイストリート）になっている。内側のエリアでは自転車の乗り入れすら禁止されている。ビルバラでは建物は全て2階建である。住宅は遊び場を中心にグルーピングされて

おり、各建物は細かく分けられ、その建物の間には中庭が設けられ、塀でかこわれている。さしずめ屋外の部屋というべきもので、子供たちの心理にあわせてデザインが考えられている。



スウェーデンのチルナは北極圏の約100キロメートル内側に位置する鉱山都市なのである。冬が短く、寒い。夏は長く、太陽が24時間輝きつづける時がある。このような厳しい環境にありながら、この住宅はこの地区全体がプレイ・スカルプチュアとなっている。子供たちは自然の岩石、四角いコンクリートの塔、石の家、坂道、段差のついた遊び場を動きまわることができるようになっている。

## 新住宅地の遊び場 — 日本において —

都心から離れ郊外の住宅地へゆくと、欧米型の公園に近い施設はめだつ。ショッピングモールや自然公園、スケートリンクや新型のジャングルジムなど数々のアイデアに満ちた巨大遊具。



地方都市の遊園地

それらを見ていると日本もまんざらでもないかなと思えてくる。確かにそのアイデアの豊かさ、スケール、デザイン力、安全性それらにおいて日本は世界をリードしていると言えるだろう。

しかし、ここではたと疑問が沸き起ってくる。これらの施設は確かに見ていて驚くべきものなのだが、はたして子供たちはこれらを本当に必要としているのだろうか？



ローラースケート場

これらの施設はあまりにもよく考えられすぎていて、大人の知恵が子供の想像力をコントロールしてしまっているのではないだろうか。子供たちは未完成なもの集積のなかから何かをうめてゆく。そこに想像力が芽生えてくるので、ここでも大人たちは都心部でできないことを郊外で思いっきりやろうとして、張切り過ぎてしまっているのだろう。もう少し子供の生理に準じた遊び場作りがあってほしいものだ。



商業施設のイベント用テント

## 古い住宅地の遊び場 — 欧米において —

古い市街地の最大の問題は自動車によって機能がマヒしてしまっているということである。一度失われてしまった静かで安全な生活環境をいかに回復するかが重要である。子供の成長にともなって、安全な環境が手狭になり、街路へ出てゆくようになる。するとそこでは遊びの用具を準備することができない。郊外のように広い庭園を持つことができない環境でその問題の解決方法をさがし出さねばならないのである。



ストックホルムのイエーテボリ地区はもともとスラム街であったこの地区内のすべてを修復作業が行なわれたが、子供にとってなによりも大切な中庭は暖かい保護された雰囲気を持している。そしてさ

ほど広くない中庭は立入り禁止の場所を設ける余裕がないため、木立ちと灌木によって庭らしさが確保され、全ての場所が遊び場として利用できるように考えられている。

アムステルダムは人口密度の高い都市であり、その中心地区は地価が高く、子供の遊び場も極端に不足している。第2次大戦後に再開発プランが始められ、多くの遊び場が作られた。それらの大半はビルの間にある小さな空間を利用し、施設も移動式のものの、歩道、長い街路ともかく利用できるところはどこでも遊び場として利用されている。

ロンドンのノッティング・ヒルの遊び場はノース・ケンジントンの人口密集地区のなかにあり、1300㎡の広さがある。遊び場には、パピリオンの建物をはさんで西側に学童の遊び場と5歳以下の子供の場所がおかれている。ここは高い塀に囲まれていて大人を外にしめだす結果になっている。屋内の遊びと屋外の遊びでは、子供たちが屋内と屋外を自由に動き回れるようになっている。



小さな子供と大きな子供の遊び場の間には境界が定められている。屋上も遊び場の一部になっていて、レベル差を有効に使っていて、年長のしか登れないはしご。屋上からの滑り台など工夫がなされている。またメインの冒険エリアアスファルトと、土の地面がそのままになっている。タイヤで作られたタワーや板切れで作られた城、ロープで組まれたネットなど大人が少々はらはらするような空間になっている。



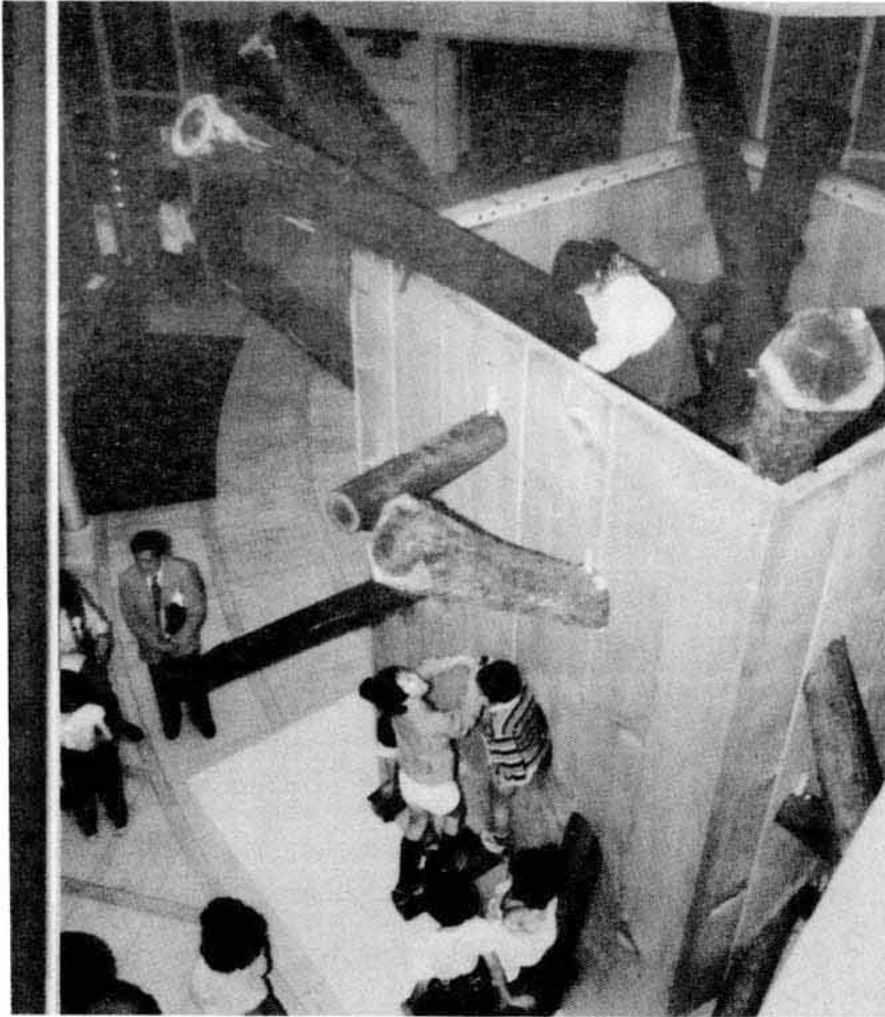
ニューヨークのセントラルパークには合計5つの遊び場がある。67番街にある最初の遊び場は外側の舗装されたプレイエリアと内側の砂地のエリアがある。2つのエリアは低い曲がりくねったコンクリートの壁で分けられている。遊具は申し分がなく、デザインもほぼ完全に近い。つまり、遊び場が創造的な場所にするための自由な建築遊びの素材が加わり理想的なものになるろう。

29番街の小公園は地下にプラネタリウムが設置されていて自然科学の分野に重点がおかれている。地上はプレイエリアになっている。2つの異なった機能が一体化し狭い場所が有効に使われているのが特徴である。ニューヨークの遊び場はさすがにバリエーションが豊かである。子供たちが大都会のストレスから解放され、幼い想像力を精一杯回復するには、それだけ独創的な遊び場が要求されるのである。



例えばフェスティバル・ストリートという計画は市内の全てを対象に夏の間交通が遮断され、その場所に施設が設けられる。その計画設計は建築家や芸術家に任される。旗、木立ち、ベンチなどを設け雰囲気を作り上げ、舞台やスクリーンや展示場など大がかりな仕掛けが用意される。そこで行なわれる活動も子供のための手芸、工作教室、成人学級、運動会、ストリートゲーム、移動式のミニ遊び場。ショッピングモール

のなかに歩行者専用街路ができています。今では世界中のどこでもみられるが、カリフォルニアのフルトン・モールがはしりで古い住宅地区にあった商店街が模様替えに設置したのが始まりである。子供たちは車により、かつて遊び場であった街路から追い出されていたわけであるから、このモールの出現はなつかしい遊び場の再登場ということになり彼らの天国となった。



## 古い住宅地の遊び場 — 日本において —

何もかも消えてしまうなかで人々は残された場所で何とかしようとするものである。古いもののなかには必ずいいものがあるのである。多くの人々の手を経てできたものには、知恵がそなわっている。後世の人々は必ずそれを生かすものである。



都市化現象のなかでとり残された急斜地の緑地を遊歩道にしたり、バードウォッチングの場所にしたりする動きが定着してきている。また、遊び場を「場所」という観点で考えるのではなくヒューマンの観点でとらえることによって地域の様々な人がボランティアで子供の遊びについて考え、一緒に作りだそうとしている。

これは、定着すれば新しい文化運動にまで発展する可能性が大いにあるので、その可能性を注目する必要があるだろう。

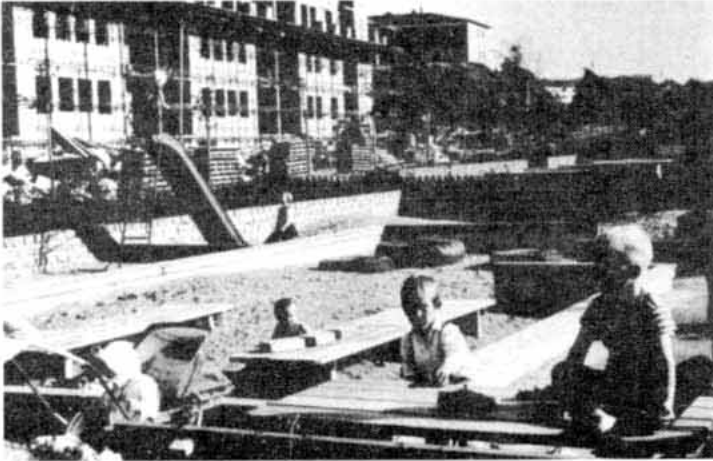


それでは次にどんな遊び場を子供たちに作って見たらよいか遊び場の種類を考えることにする。

小さな子供たちは住まいに近い場所がふさわしい、なるべく危険にならない遊具を考えねばならない。ブランコなどはまだ早い。もっと単純な砂地、芝生、テーブルやベンチなどがオーソドックスなのであろう。空間は囲まれたスペースが適当なのである。遊具は子供と一緒に遊べるものがよいであろう。木切れ、木箱、古タイヤなどのガラクタが子供たちの想像力をこよなく刺激するのである。それより大きな子供たちは、幼児の活動する場所より離れた場所が望ましい。遊具もより高度なものとなり、その場所が子供どうしの触合いの場所となることが望ましい。遊び場全体を砂地にして、そのなかに遊びの用具を配置するのが望ましい。

西ドイツのシュツットガルトのデッケルシュトラッセにある遊び場にはピンポン台、トランプ遊び用テーブル、砂場、回転木馬、チェス盤などが置かれている。スウェーデンのヘルシンボリにある市立公園は低層住宅と新しい中層ブロックのミックスした住宅地のなかにあり、年長の子供ということで遊び場は2つに分かれている。1つはフェンスに囲まれたボールゲーム・エリアで冬にはスケート・リンクに利用されるのである。他の1つは周囲を舗装したエリアで砂地に囲まれている。ここにはいろいろな遊び用具がおかれている。

運動公園はあらゆる年齢層のためのスペースが用意されている。つまり、子供や大人だけでなく、従来の公園では無視されることの多かった中間の年齢層にも配慮は必要である。テニスコートやボールゲーム・エリアがブランコや砂場と同じように大切である。



運動公園は、近隣地区の中心としての役割をはたすように、地域的な交歓の場所である。面積は1500㎡あれば十分である。空間の有効利用が大切で、限定された面積のなかに多くの内容を盛り込むことが必要である。運動公園の目的は、子供を年齢や遊びでの段階によって分類して檻のなかに閉じこめることではなく、選択可能な豊かな環境を作り出すことである。

運動公園のなかでも都市型というよりは田園型の公園もある、イギリスのナンイートン運動公園がそれで、周囲の住宅地にはテラスが立ち並んでいる。公園は緑の芝生と美しい木立ちのなかにあり、魚釣りや水遊びのための広々とした池がある。



公園の真ん中には2つの小高い丘がある。滑り台が設けられ、2つの丘の間にはロープウェイが張られ子供たちはミニゴンドラで2つの丘を渡って遊ぶことができる。砂場に隣接して水遊びプールが設けられる。私たちは遊び場をハードの部分からだけ考えてしまう。遊具や遊び道具がどうあるべきかと考えてしまう。でもその前に考慮しなければならないことがある。それは遊び場そのものについて子供たちを主人公にして考えられるかということである。遊び場とはどうあるべきか。子供たちが安心して遊び、親しみを持って遊べる雰囲気をもどくようにして作れるか。日光が強すぎないか。多くの遊び場に欠けているのはこういった点についてきちっと考えることである。大人たちは外の環境の解放性を評価しがちである。しかし、大切なのは子供たちが壁やシェルターで囲まれた部屋を好むという点である。風にさらされたくない。自分たちの場が欲しいのである。大人たちが彼らのプライバシーを無視すると彼らは遊び場を利用しなくなる。彼らは地下室、ガレージや住宅地、河べりのヤブ、高速道路の下の空き地、物置などに逃げ込んでゆく。

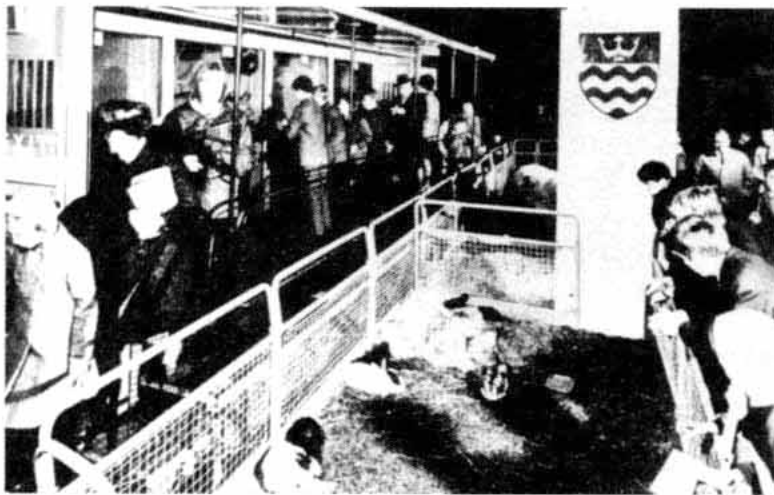


彼らに「部屋」を作ってやるには土手、植込み、板塀、レンガと様々な仕方があるがあまり大袈裟にする必要はない。また地面もやわらかい砂地、転んでもいいように芝生も必要である。アスファルトも単調に思われるが、自転車やオモチャの車などで遊ぶために必要である。ただ変化をつけさえすればいい。凸凹のある場所はずっと楽しい。石を置いてもよい。それらが子供の想像力の助けで船になったり、山になったり変化するのだ。遊具はあまり計算されすぎると、子供にあきられてしまう。未完成で可能性を秘めている方がいい。彼らの自主性が生かされる場所でないと、子供たちは反抗して破壊的な遊びを行ってしまう。これも理由があつてのことなのである。

冒険遊びは大人たちがすぐに干渉したくなる遊びである。法と秩序を重んじる大人たちは、子供にそれが存在しないと信じる。ところが子供は自分たちの秩序を持っている。秘密を守ることがそれである。そのために木の枝で小屋を作ったり、岩の穴倉にかくれたり、壊れたボートを直して海に出てみたりするのである。

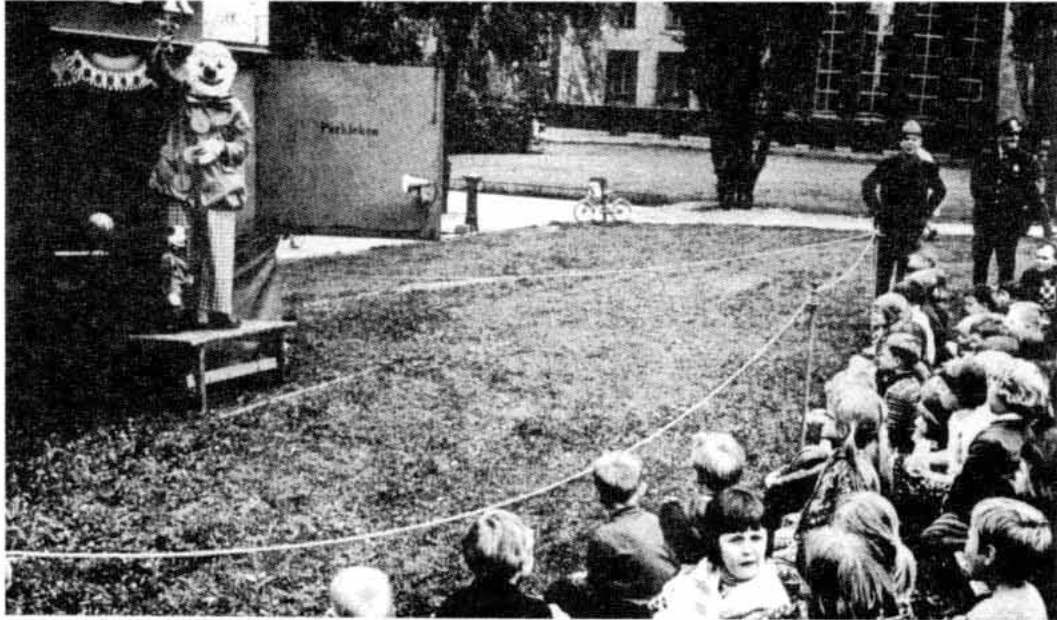
これらのことは郊外の広い自然が残された場所であれば容易にできる。しかし、都会では同じことを行なおうとすれば全て危険になるのだ。都会の遊び場のなかにそれらを組み込んでやるのが大切である。それには各ユニットを作って、それらが一定地域のなかで子供たちの生活のリズムに従って利用されるように作られることがかんじんである。

「たき火」はこれも郊外に生活しないとなかなかできない。これも冒険遊び場のなかでできるようにしてやるのが大切である。ただ他の遊具に燃え易いものがある時には十分注意する必要がある。古くなったドラムカンなどを利用するのもよい。



子供たちは「動物」をこよなく愛す。彼らは人間を愛することを、動物を愛しながら学んでゆく。現代の都会生活では犬や猫などのペット以外に生活のなかで動物に接する機会は少ない。それらの動物は決して大型動物である必要はない。ただ予算、管理、衛生の問

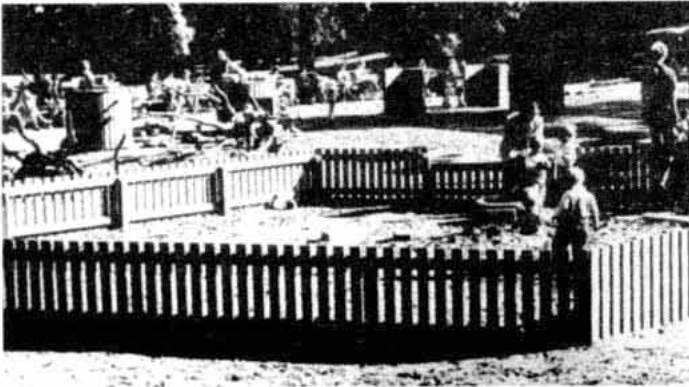
題があるので、それらの点をクリアーにする必要がある。ウサギ、ヒツジ、ヤギなどの郊外にいた動物で食欲の盛んな動物が子供の関心をそそるのだ。それらの動物が安心して生活できる環境においてやること。子供があまり乱暴をふるわないようにしてやること。動物に休息の時間を与えてやることなどが大切である。



子供たちは大人の仕草を真似ることが好きだ。だからといってすぐ人前でそれをやってみせるわけではない。「劇」のまね事が彼らの心の発達に欠かせないことは確かだ。彼らが同じシーンを何度でも繰り返して演じてみせるのは、そこから何かを学ぼうとしているからだ。彼らは日常生活で体験したことを何でも劇にしてしまう。カード遊び、将棋、人形遊び、着せ替え人形、それは自己表現欲である。子供の時には自然にそれが発揮される。自発性が養われる遊びであるが残念ながら大人になるにしたがって失われてしまう。そのためには数人の子供が入れる木の箱が必要となるだろうし、想像力をおし広げるためにプレイリーダーが

いたり音楽ができる人がそばにいるとよい。

遊び場は屋外だと雨や雪の日には使えない。その時に子供たちは家に帰らなくても遊ぶ場所を欲しがるものである。もちろん運動公園のような空間は手に入れられるはずもない。建物は簡単なものでよいのだ。しかし、活発な遊びや乱暴な扱いをされても耐えられるようにデザインされていなければならない。そこには壊れやすい備品や仕上げを使ってはいけない。そのような建物は子供たちの建物なので彼らの価値観に合わせるべきである。



小さい子供が一番好んで遊ぶ「砂遊び」は、創造性を高めるのにいい。城、トンネル、ケーキ、動物、山、家などなんにでもなる。手軽に手に入れられるのになぜもっとふんだんに使わないのだろうか。多くの砂場では砂の量が少なく、子供が十分に力量を発揮できるようになっていない場合が多い。スペースは狭い

ものが好ましいが、それがいくつかあるとよい。そのなかに適当なオモチャ（木製）などが彼らを刺激するだろう。

これも大人たちが嫌う遊びだが、水溜まりや小川でする「水遊び」も夢中で行なう遊びである。



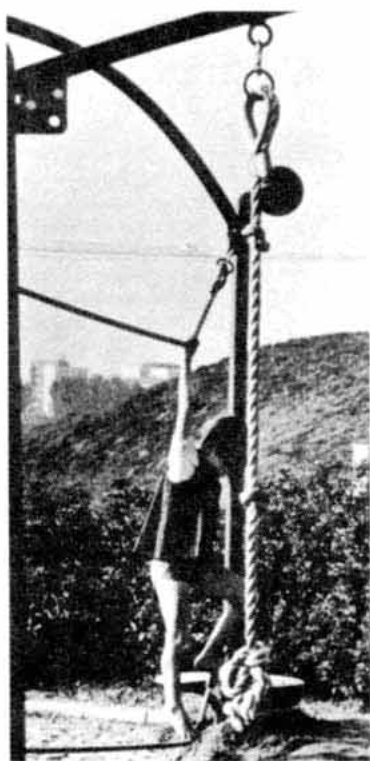
水溜りは都会ではほとんどなくなりつつある。下水も完備され、危険な池には蓋がされ、子供たちが水溜まりからしめ出されてしまった。

問題は公園や街路に水溜まりを計画的に作って、この機能をはたすことができるかということである。費用の問題もかかわってくる、安全になおかつ維持してゆくにはお金がかかる。パリのポンピドゥーセンターにあるプールは芸術家ニキの作品によるユーモラスな遊具から様々な水鉄砲の贈り物をもって子供たちがはしゃいでいる。夏になればそこは子供の水遊びとして利用される。ニューヨークの子供たちは消火栓をぬき水遊びを楽しんでいる。単純な方法でも子供はそれを利用する仕方を知っているのである。



「乗り物」は小さい子供も大きい子供もますます利用する遊具である。大人たちと同じようにしてみたい彼らの積極的な生命観が活かされる場でもある。しかし実際にはスペースの問題があって、昨今の道路事情からすると危険でなかなかすすめられない。運動公園のなかにそのようなスペースを設けることはできるがかなりのスペースがないとたくさんの子供が遊ぶことができない。そこで大人たちは公園に自動車や電車、汽車、船などを木やコンクリートで作ってみせ、子供はそれを遊具として用いている。実物の代用品としてはうまくいっているようであるが、動かない所に難点がある。

大きな子供は自分たちの体を十分に使って遊ぶことを好むようになる。競争心も手伝って「ボール遊び」が大きな子供たちのかっこうな遊具となるのである。小さな場所（25m×40m）で十分でそれが数多く欲しい。金網か塀で囲っておけば別の人たちをわずらわすことはない。フットボール、卓球、テニス、バスケット、バレーボールと広さを工夫すれば何のためにも使える。



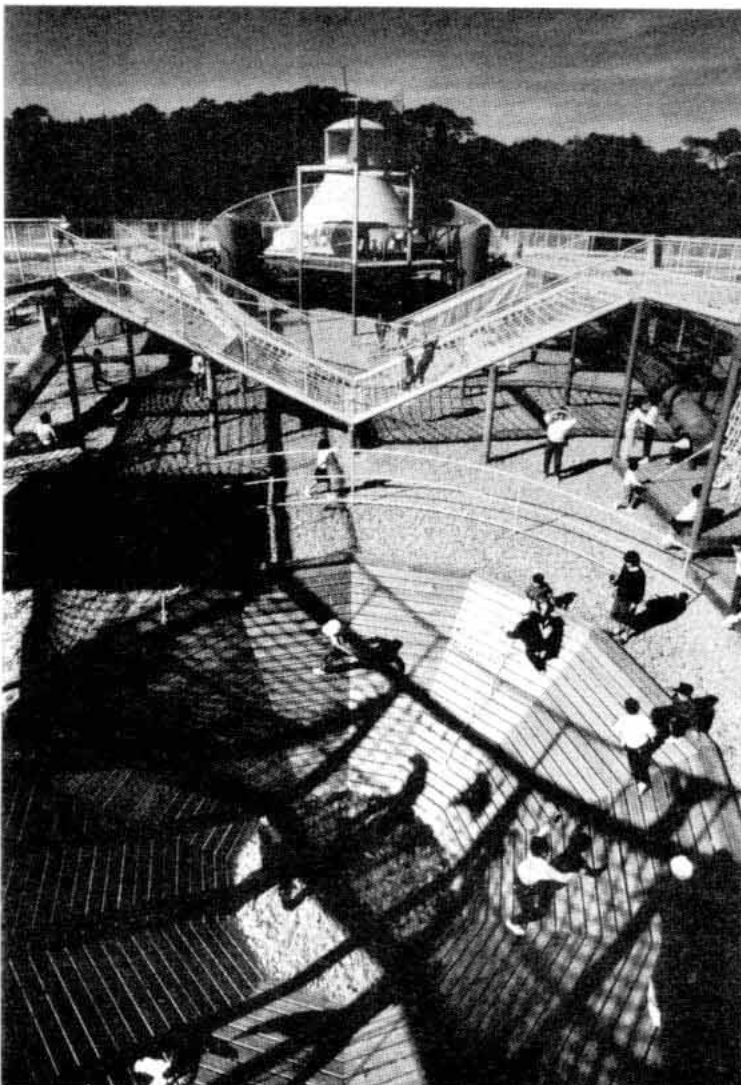
他に「ロープ遊び」「タイヤ遊び」「小屋遊び」と様々なものがあるが、これも安全面を重視しすぎる大人がつまらないものになっている場合が多い。なるべく子供の自主性を尊重した遊具にしてやることが大切である。

このように場所に合わせて旧来の遊び方が復活することができるのである。もう少し子供の方によっていけばまだまだ都会の中に遊び場が生まれる可能性がいっぱいある。パフォーマンスや学習や移動性などの要素も加味するとよりダイナミックな遊び場のビジョンが開けてきそうである。

## 遊び場の種類 — 日本において —

遊び場の種類の多さでは日本は断然トップクラスである。地方自治体が使える予算額からすれば何でも可能なのである。しかし規模が大きければよいというものでもない。ディズニーランドをいくら作ってもそこで子供が自在に遊ぶことができなくては意味がない。

最近の第3セクター方式でできる地方の遊び場はやや遊技施設に傾向していて商業的性格が強すぎ、公共性が軽視されてはいまいか。



巨大遊技施設

確かにアイデアは素晴らしいが、その施設までゆくの  
に車で何時間もかかるのでは、なかなか訪問できる  
ものではない。遊具などのアイデアにはしるのもよい  
がもう少し、根本的な所に目を向けるべきではないか。



疑った遊具

考えられるべきは、彼らの日常生活のリズム、彼ら  
の肉体が程よく使われ、想像力が発揮される自由さが  
彼らの手に渡される施設、場の創生がなによりも求め  
られている。つまり都市がもっとも活気づいている場  
所にも子供の遊び場がなくてはいけない。



様々なアイデアにとんだ遊具

それらの場所から排除してしまっている現状を考えると、それをもう一度作る運動をおこすべきであろう。そのためには都市は血を流さないといけないのである。

報 告

ロワール河畔の庭園

石田和男

## ブロワの庭園

ある日ジャン＝ポールは私に少々遠いけどブロアの町まで来てみないかと誘ってくれた。ブロアはロワール川の左岸にあり、昔からこの地方の中心都市である。なかでも美しいブロア城は13世紀にブロア伯爵の居城として作られたが、現在のような城館のたたずまいを持ったのはシャルル・ド・オルレアンの時代になってからである。その後ルイ12世、フランソワ1世、ガストン・ド・オルレアンなどがそれぞれの時代にふさわしい姿を加え、普遍的な美へと完成させていったのである。今ここを訪れる人は5つの異なった建築様式を見ることができる。

外見の美しさとは裏はらに、この城からなんとしても陰惨なイメージを拭いさることはできない。それは1588年のアンリ・ド・ギーズの暗殺事件である。このギーズ公は宗教改革の時代にカトリック同盟の指導者となり数々の事件に関与した人物である。特にすさまじいのがサン・バルテルミーの虐殺である。単なる権力欲だけではこれだけのことをやってのけられるとは考えにくい、それほど残酷な男



である。彼は後の国王アンリ 4 世のアンリ・ド・ナヴァールと対立した。宗教改革派に属するナヴァール王はフランス国内だけでなくベルギーなどの外国勢力とも結びつき政治的影響力をそなえていた。

ギーズ公はアンリ 3 世に嫡子がないことを良いことにして王位を狙い戦争をおこしたがうまくゆかず、近衛兵によってこの城内で暗殺された。

日本の戦国時代さながらの出来事である。



ジャン＝ポールはわざわざプロワ駅まで車でむかえに来てくれた。彼は前日の金曜日からこの町に滞在して、ここの市長であるジャック・ラング文化大臣とミッテラン大統領と一緒にルーブルの中庭のチュイレリー公園の改造計画の検討を行っていたのだという。彼によれば大統領は計画のあらゆる点に関心を示し、執務に忙しいにもかかわらず農業や植物学や建築について勉強したということだ。今後実現される予定になっている庭園の改造計画のなかでこのルーブルの計画が大統領にとって一番愛着を感じるものだそうである。

そんな話を聞きながら私はどこまでも続く森をじっと眺めていた。このロワール川の城はどれも自然に対比して別段その偉容を誇ろうとしているわけではない。むしろ起伏のない平坦な土地にあってその平面的なリズムに同調して、あえてそれから突出しようとしていないからである。私たちが目にしてきたこれらの城はそれらがポスターであれ画集であれ日本的な城の姿にあらかじめ編集されていたのである。私は最初に片すかしを受け少々がっかりしたのだった。こうやって森の中をただひたすら進んでゆくとこれらの城の出現がそれだけでも事件になるほどの存在感をそなえることが自然に感じられるのである。

やがて車はクール・スュール・ロワールという町を通りリラ・シェネと呼ばれる精神病のクリニックについた。ここの病院はヨーロッパではかなり風変わりな療法を行なうので有名なのだそうである。ジャン＝ポールの奥さんがラカン派の精神分析家であり、以前ちょっとした機会に精神分析の話をした際に門外漢の私が精神分析理論のゆくえがどうなるかより治癒の方法に関心があると話をしたことがあった。それが奥さんに印象深く残っていて、ジャン＝ポールにロワール川へ行ったら私を是非ともそこへ



案内してやってくれと言われたそうである。病院の回りは平坦な牧草の生えた土地で所々に森林が視界を遮っていた。建物は広大の土地に点在していて、必ずしもそれらの建物が機能的に連関している風でもなかった。車が止まると建物の中から白い口髭を生やしたなかなかダンディなロマンスグレーの紳士が私たちを出迎えに来てくれた。まるで城主のようないかめしい風貌のせいもあって私は話のとっかかりを見い出せず自分にイラだっていた。

そもそもこのクリニックは私的な施設であるがまかなえない経費は国からの補助金で補っている。もちろん入院する患者も入院費を一部負担している。しかし何よりもこのクリニックが特徴的なのは、入院する患者とクリニックが労働契約を結ぶところにある。患者はこのクリニックのなかで自らで選択した仕事をする事で賃金を支払われる。彼らのために、この施設のなかにはテレビ番組の制作を行なう設備がそなわっている。木工家具を作るための全ての機械道具が備わっている。彼らは一日のなかで一定の時間のあいだその労働に従事する。なぜこのようなシステムを導入したのかと言えば、抑圧を取り除くためには患者の中に対抗できる自己権力を作ってあげなければいけないからである。多くの患者は今までの生活を継続する限りでは、自己を抑圧する原因に対して対抗手段を取るチャンスが与えられていない。彼らは社会に対して父権的抑圧を感じそれに押しつぶされようとしている。その恐怖感から解放されるために治療の方法として考えられるのはそ



れに対抗する自己権力を作る手助けをしてやることである。普通であれば、社会とは全く異なった環境を作り、そこで全体としての自己を回復する機会を待つのであろうが、このクリニックは逆の戦略をたてる。彼らは抑圧の原因である現行の社会システムと同じものを再構成するのである。〈労働－賃金〉というサイクルを労働によって再生産することによって、患者は少しずつ自己のアイデンティティを取り戻し、やがて社会的な意志を持つようになる。自分の力で社会性を回復するようになる。このユニークな治療法にはラカン派の考えがベースになっているという。このシステムを支える人たちは精神科医師や精神分析家だけではなく、映画のプロデューサー、弁護士、作家、スポーツ選手、画家、演劇の演出家、科学者など社会のあらゆる階層の人たちがボ



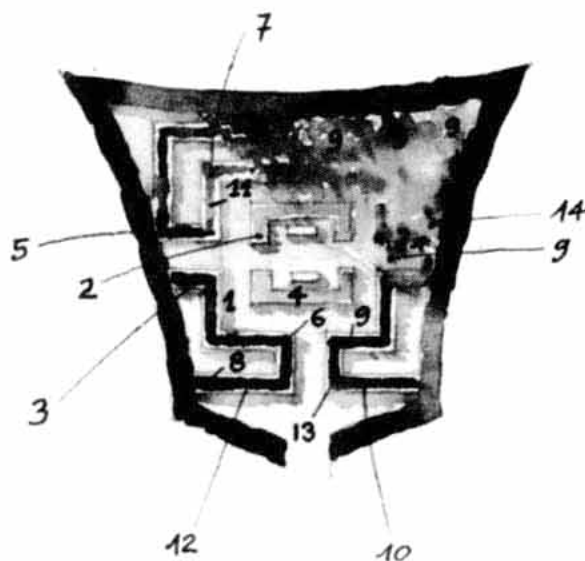
ランティアで参加している。スタジオで彼らが作ったドキュメンタリーの作品を見せてもらったが、作

品として立派なものだった。ややもするとハンディを負った人たちの仕事が社会の下支えをする方向にむかいがちなのをむしろ逆に社会の注目を受けるような方向へ跳躍させるには、その前にそれらのことに関する思考の飛躍がなければできないことである。ノーベル賞作家 大江健三郎が息子のヨーヨーに対して愛情をそそいだ結果が彼を社会的に注目されるほどの存在にまで高めることができたのも同じような治療のプロセスがあったではあるまいか。ここシェネのクリニックではそれが社会化された形で存在するのである。ユニークさはそれだけではない。

近代的な設備のあるテレビスタジオに隣接して食堂があった。それはオリエント特急の客車を2階の高さまで引き上げられてできている。医者も患者も一緒になって一流の客車の食堂のなかで食事をしながら外の風景を楽しむことができる。周辺は見渡す限り牧場であたりに人家が一軒も見えず、のどかな風景がどこまでも続いている。現在ジャン＝ポールはここに庭を作ろうとしている。コンセプトから設計、作業までこの患者が一緒になって参加するのでおそらく世界で最初の〈クリニック庭園〉となるであろう。私とその庭園の場所を見せてもらった時にはまだ小さな苗木が植わっているだけなので完成した際の美しさは想像力にまかせるしかなかった。次回の訪問の楽しみとして残っている。



昼食を終えてそろそろこのクリニックともお別れの時が近づいてきた。建物の外に出てみると一人の女の子が急に私に日本語らしき言葉で話かけてきた。しかし内容は判読できない。彼女は日本語に興味を持ち学んでいるが、おそらく実際に日本人に学んだわけではないので、個々の単語は日本語のように聞き取れなくもないが、その意味するところは全く理解できなかった。私はその場でなんとか彼女の言わんする、意味を理解しようとしたが無理だった。この体験によって、私はここで行なわれている作業の困難さに触れたような気がした。ともかくここで働く人々は途方もない忍耐力で彼らの一日も早い社会復帰を願って働いているのである。そして無事にここを退院した人たちはかなり高い確立で社会復帰している。日本ではまだ総合病院では精神病患者と一般の患者とを一緒に治療することがままならない状況にある。病気を克服するために患者をあまりにも対象化しすぎてしまい、結果として社会から孤立させてしまっている。やはり彼らが社会の構成員の一人として自覚できる道をいつまでも開けておかなければならないのである。



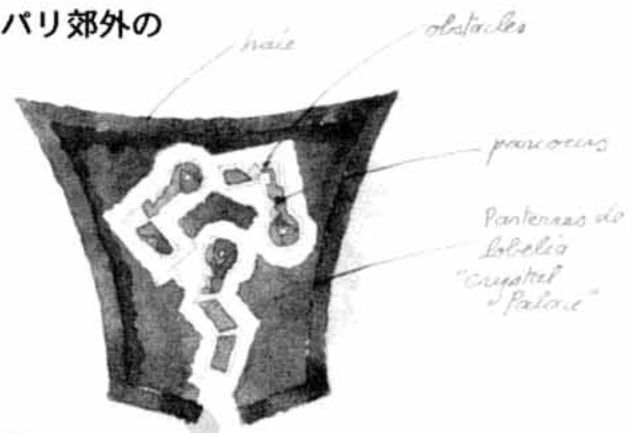
このクリニックを離れてジャン＝ポールは近くにあるシャンポール城に連れて行ってくれた。少々重々しい雰囲気の中で気がふさがちな僕たちの心を知った彼の気遣いだろう。日本でも一番ポピュラーなシャンポール城は実際には写真で見ると派手さはない。建物はさほど大きくない。おそらく建物全体のバランスの良さからくる印象なのだろうか偉容感がない。

私たちは車から下りてしばらく小雨にけむるシャンポール城を眺めて幻想的なその姿に魅了され、しばし時のたつのを忘れていた。するとあたりの静けさを破る異様な機械音とともに、城の裏手からヘリコプターが一機飛び立った。ヘリコプターは機首を北に向け、真っすぐバリの方向をめざして飛んでいった。ジャン＝ポールはあれにはジャック・ラング文化大臣が乗っているはずだと言った。前日大臣と会場に参加した彼は権力をことさらのようにふりかざす政治家の態度を心良く思わないと言った。そう言ったか言わないかのうちに先ほどのヘリコプターが引き返してきた。ジャン＝ポールは「権力者も雷には勝てないだろうね」と言って車の中に笑いながら入っていった。私たちも雨のなかを時速170キロのスピードで飛ばしバリへ戻ったのだった。



## ショーモン城の庭園フェスティバル

それから数日後、ジャン＝ポールはふらっと私のアパートにやってきた。不意なので何のもてなしも出来ないのを詫びると、大事なことを私に頼みたいと言った。彼は来年（つまり92年）秋にショーモン城の庭で庭園フェスティバルを企画しているという。主催は文化省で他にも農業省や商務省が協力しているのだそうである。プロア市も主催者側に入っているわけであるからジャック・ラングの文化省の肝煎りの企画といえよう。彼はこのフェスティバルの開催をきっかけにして、これまでベルサイユにあった国立庭園学校をプロアに移してこようとしているのだそうである。この話を聞いて私は「まるでカトリーヌ・ド・メディシスみたいだね」と言ってしまった。彼女はかねがねアンリ2世の寵愛を受けていた美人で名高いディヤーヌ・ド・ポワチェに憎しみを抱えていた。1559年にアンリ2世が運悪く騎馬槍の試合で事故死してしまい、その機に乗じてカトリーヌは復讐をなしとげようとした。ディヤーヌは以前よりシュノンソー城に愛着を抱いていたが、それを知っていたカトリーヌは、本人の意志を無視してショーモン城と交換してしまった。もはや後ろ盾を持たないディヤーヌはやむなくパリ郊外の



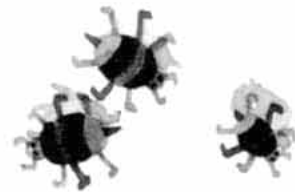
アネット城に引き籠もってしまった。この話はあまりにも有名であるが、ジャック・ラングがいくら権力を持っているからといってそれを本気でやろうとしているとしたら随分無茶な話である。日本ではと



うてい考えられないと言ったら、制度が根本的に変わるにはそういうことが必要なのだという答が返ってきた。少々冷淡な反応に私は違和感をもったが歴史感が違うのだ。もしかしたらフェアーブっている私の方が保守的なのかも知れない。

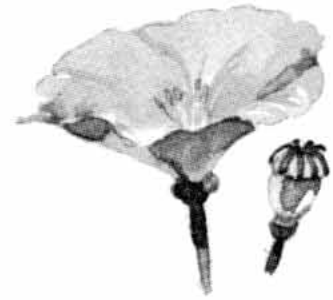
このフェスティバルが継続的に開催され、コンセルバトワールがこの地に移動してきたら、その後でこのロワール河一帯を国立自然公園にしたいのだそうである。文化の商人ジャック・ラング文化大臣らしい発想だがはたして事はそううまくはこぶかどうかその推移を注目したい。

近年の環境問題に対する人々の関心が高まり、ややもするとこの問題は暗いイメージでとらえられがちになる、それを主催者は明るくとらえ返そうとする。私たちの生活の回りに対するケアをデザイン的な感覚でとらえなおしてみるのだ。川添登の指摘にもある通り世界中で日本の都市がデザイン論的に最も特徴ある伝統を保ってきたといえる。ただこの伝統に弱点があるとすれば、それらの関心がマイクロコスモスの中で自閉的になっていることである。それらの人工的自然は高い塀によって遮られ人々の目に触れられることが少なかった。この控え目なまなざしは田園と都市を和合させてきた。私たち日本人に



はまだこの連続性が持続しているように意識されているが、ヨーロッパはとっくの昔からそれを分離してきた。環境問題がヨーロッパ人につきつけた問題はまさに中世以来都市の中から追放してしまったものを現代になって取り戻さなければならないという自覚であった。当たり前だと思っていたが自分の回りには失われてしまっていることにふっと気がつかされる。そのちょっとしたショックがあるかどうかは分かれめになるのだろう。それにはもう少し時間がかかりそうである。ジャン＝ポールの戦略はショーモン城の周辺に世界各国の庭園デザイナーによって設計された庭を実際に作ってみせ、この問題に対する人々の関心を一気に高めようとするものである。

彼のずばぬけた能力は短時間のうちにそれをやっ  
のけることである。第1回目のフェスティバルは企  
画が始まって半年以内を実現するということが  
だった。従来のフェスティバルであれば準備するの  
に優に2年はかかる。彼は一気にやってしまう所  
にこの企画の意義があるのだという。フランス人  
の持つ少々短絡的とも思われるこの飛躍はややも  
すると外国人を面食らわせるが、文化的洗練がそ  
れを大いにカバーしてくれるのである。それを実  
際目の当たりにすると身震いがしてくる。ジャン  
＝ポールは私に協力を依頼してきた。是非とも今  
回のフェスティバルに日本人の庭園デザイナーを参  
加させたいという。今からすぐに人選を行い、そ  
の人に交渉し、合意が得



られれば1ヵ月以内にデザインを完了してもらわ  
なければならない。少なくとも2人の参加者が必  
要だということだった。私はまず、勅使河原宏が  
頭に浮かんだ。彼は竹で作ったトンネルで有名で  
ある。ポンピドゥセンターにも彼の作品が陳列さ  
れている。彼はどこかの峡谷にかかる橋のデザ  
インを行なって、それが従来の機能中心よりは周  
辺の環境を意識したデザインで面白いものだっ  
た。私は一人は彼がいいのではと提案した。も  
う1人は大阪の「花博」の時の総合プロデュース  
をした小林春人氏で彼もこの分野では先駆的な  
仕事をたくさんしている人である。

ジャン＝ポールは早速日本に行って2人に会い仕事の依頼をしたいという。そこで私は10日後に2人とアポイントを取ることにした。彼が来日した時には契約書を持参して、その場でサインするという。会議ばかりして何も決めようとしめない日本のビジネスマンに聞かせてあげたいセリフだ。私は帰国してすぐ2人に連絡を取り、主催者側の企画主旨を伝えた。2人とも気持ちよく了承してくれた。時間がないから情熱がダイレクトに伝わるのだろう。ジャン＝ポールは数日間の滞在で無事役目をはたし帰国した。その後は直接当事者たちのやりとりなので私は関与しなかったが、作業は問題なくスムーズにはこんだそうである。プロ同志の仕事はそれほどスムーズにはこぶのである。しかし、主催者の努力でいくら段取り良く準備が進んでも、なんといっても主人公は花である。自然の花や木は人間様の都合に合わせてそんなに簡単に伸びたり、咲いたりできないはずである。私はフェスティバルが開催されて、





実際に自分の目で確かめるまでは信じることができないでいた。10月になり庭園フェスティバルが開催された。プロワの町の中心でシンポジウムが開かれた。世界中から多くの参加者が集まってきた。日本語では庭師、フランス語ではベイザージスト、英語ではランドスケープアーキテクトと呼ばれるひとたちがこの新しい分野を発展させようと集まってきた。オブザーバーとして建築家、役人、ジャーナリスト、ファッションデザイナー、哲学者、詩人である。彼らは自分の関心に合わせて自らの庭園観を述べていた。当日発言を予定していた哲学者で精神分析家のフェリックス・ガタリが病気で急死し参加できなかったのが残念でならない。彼の「器官なき身体」や「エコゾフィー」がどんな庭園観を示してくれるか、今となっては天国にいる彼に聞くしかなかった。私も何か発言しろというので、たまたま渡仏する前に訪れた京都の平等院にからませて浄土式庭園について話をした。それが今日の庭園とどのように結びつくかを一時間あまりの間に話すのには骨が折れた。

平安時代は貴族が支配していた時代である。藤原道長はまだ支配体制が確立したとは言えない自分の不安をなんとか解消するために、平等院鳳凰堂の建立を思いついた。折しも仏教会では源信が主導する浄土教が貴族たちのこの不安を平らげるのに多いに役立った。これまで中国を始めとする海外からの学問や芸術、宗教の移入は菅原道真によって止められた。すぐれたもの、幸福は自分の生きているこの時間や、この場所にはないというこれまでの考え方をこの浄土の思想は現世に焦点を当てることで変えた。



つまり、天国は外部にあると思われていたのが、その後日本の国土のなかにあると考えられるようになった。自分の現実の生活、自分の周囲の風土が急に大切に思えるようになったのである。日本における風景の誕生と言ってもよい。この内部風景のなかに浄土を見出すことは新しい美的な生活を推奨することでもあった。鳳凰堂内に飾られている彫刻には歌舞・音楽を楽しむ姿が見られるのもこの考えを示している。本来であれば厳しい自己修練を経なければ得られないしょうじょうの回心や悟りも、この国では容易に可能になった。浄土思想の誕生によってより深遠な宗教的洞察からは見離されてしまったかも知れないが、オプティミスティックな現実主義は完全に根付いたと言える。そういう意味では確立されるべき自我は遠のき無意識が作り出す風景の持つ形式主義が支配的力を持つようになった。そういう意味では日本人が一番近代主義（現代に近い）に近いところにいたのかも知れない。この内化された天国はやがて黒船に乗った外人によって発見され、夢遊病的自閉症状態から目を覚ますことになった。少々病理的な段階にまで達していたこの精神が平衡性を獲得するにはかなりの紆余曲折が必要となった。まず人々が行なったことは外人（そとびと）に見ら



れた風景（自然）を彼らと同じように眺め始めたということである。これでは今までの天国もたまったものではない。千年以上もの農耕生活のなかで剰余の結果生まれた風景が新しい資本主義のシステムのなかに取り込まれてゆく。技術、機械、制度、機構が次々と導入されみるみるうちに日本の風景は変わっていった。この外部から見る眼差しはやがて近隣の国々へもそそがれ、それらの国々の風土をも変えていった。朝鮮半島、中国、台湾はこの時代生まれた風景をそれぞれの国のなかに移入されていった。今でもその時代の名残が残っている。やがてこの運動の速度は加速され極度に達し生まれた風景が広島と長崎である。自壊的風景の誕生である。これが精神に与えた影響ははかり知れないものがある。戦後50年経過した今日でも加害者被害者相方でそのダメージから脱することができないでいる。ところがこの戦争の教訓は風景論的に言えば戦後になっても何も生かされなかった。戦争後に日本の風景を塗り変えていったのは、もっと人工的で派手でゴテゴテしたものだった。消費を対象にしたあらゆる宣伝広告の美学がこの小さな国を一瞬にして飲み込んでしまった。この風景観は北海道から九州、やがて沖縄までをも一つの国家という国家観をあらゆるイデオロギーを越えて誕生させた。アメーバのごとく発生し繁殖してゆくこの風景はこの国の伝統的な風景を断片化させ、その統一的な貌を見えにくくさせている。海岸の消失、都市周辺部丘陵地の緑地の消失、湿原地帯の消失、山間部における広葉樹林の減少。



ところが経済が失速し社会の変化のスピードが止まると、人々のまなざしのなかに再び内的な風景が再生してくる。

それを見つけ出すには猥があまりにも変様してしまっているのに、すぐには見つからないであろう。

人々はそれを見つけようとするまなざしは持ち始めたようだ。

以上のような話を終えると質問が返ってきた。私の発言は保守的で東京の風景の本質は新宿や渋谷の変化してゆくビルやネオンにあるのではないかというものだった。私は確かに外国からくると逆にそれが東京の都市の特徴として印象づけられるのであろうが、それもエキゾチスムの一つではないかと反論した、実際日本では明確な方向が定められたわけではないので誰も断定する権利は持っていない。このようなフェスティバルがあることによって文化や風土について考える機会を与えられたことに感謝した。

こうやって会期中、世界中からショーモン城にたくさんの人々が訪れ、この実験的な試みを受けとめられたことはすばらしいことだ。それは政治家たちの思惑を離れ、これから生まれてくる人類の現実にいやがおうでも直結した問題なのである。



## シノン城とワイン

パリの私の友人達は比較的呑兵衛が多い。最近ではお酒を飲まない人が増えているのに比べて伝統的なフランス人は昼間でも酒を飲む。会社によっては昼休み時間が日本と同じ様に1時間に変わった。食事もレストランでフランス料理を食べるというよりはカフェでクロックムッシュにカフェオレ、サラダにパンだけですます人たちも増えている。それもそうだろう月収6000フランや7000フランで昼食をレストランでというわけにはいかない毎日。つまり、私の友人達は年齢もいっているせいもそこそこの収入があって、昼食にワインを飲めるということなのだ。しかし彼らは派手なレストランやビストロを選ぶわけではない。昔ながらの昼だけしか開店しない食堂にゆく。定食のメニューの数も決められている。極端な場合には一品だけというのものもある。オードブルは数種類のソーセージの組合せである。自分で好きな量のソーセージを切って食べるのだが、今ではそれもパスする人が多い。ともかくメインディッシュ一品だけ。私が国のグルメブームはいっこうにおさまりそうもないが、本家本元のグルメの大国ではダイエット、ヘルシーがファッショナブルになっている。それでもインテリアデザイナーのクリスチャン・リェーグルはこの豊かな習慣を頑固に守りぬいている。彼はオードブルにソーセージを数品選びそれをパンと一緒に口のなかにほうばりながら



時々ワインでそれを胃の中の奥の方にまでおし込む。彼は私たち日本人と食事する際に一度も日本料理を食べにいったことがない。パリで日本料理を食べに行くほどナンセンスなことはないからだ。それは理屈としては正しい。でももし私が日本料理しか受けつけないとしたら、この理屈はどうなってしまうのかなと考えてしまう。でも私は少々時代おくれのこの中華思想がひどく気に入っている。「ルドーム」の奥にある魚を専門に食べさせる別館。レーヌ通りとアサス通りの角にある「プティパリジャン」。小さいレストランだけれど家庭的な雰囲気にもまれていて始まると予約ですぐいっぱいになってしまう。こういう所には必ずといってよいほど有名なファッションデザイナー、ジャーナリストなどと流行に敏感な連中が出入りする。そのクリスチャンが必ず注文するワインがシノンである。この赤ワインはロワール河畔で取れるのだが、意外に知られていない。ポジョレと同じようにフルーティなのであるがこくがあってワインらしい味わいがある。といってブルゴーニュのワインのように重くないので食事に凝る必要がない。そういう意味では時代の符丁にあっている。値段も700円から1500円位なのでお手ごろである。日本では数社がシノンを輸入しているがあまり知名度がない。ポジョレの方がずっとポピュラーだからだ。クリスチャンは前から日本にシノンを入れたらいいと言っていたので日本の友人に話をしたら興味を持った。早速フランスへ呼びよせ



た。ジャン＝ポールの友人がシノン市の市長なので彼の紹介で市長に会うことにした。市長は快く会ってくれるということなので翌日シノン市まで出掛けで行った。パリのモンパルナス駅からTJVに乗ると45分、ツール駅に着いた。駅のホームにはわざわざ迎えの人が来てくれていた。車でシノン市まで連れて行ってくれるという。その手回しの良さには関心したがこの国の田舎は交通の便が悪い。トゥールの町からシノンまでは深い森の中を1時間ほど走らねばならなかった。シノンという町は『パンタグリエル物語』の作者ラブレーが生まれた都市である。いきなり中世の世界に侵入したような、映画のセットの世界に驚かされた。ともかく昔の姿をそのまま残している。ロワール河の支流であるヴィエンヌ川の河岸に添って建物が続いているが、その家屋を一段高い丘の上から見下ろしているのがシノン城塞である。この城は12世紀にアンリ・ブランタジュネ2世によって建てられたが、中央部の城塞は14世紀に建造された。ジャンヌ・ダルクは1429年にシャルル7世とここで会っている。



男の衣裳を着け、口数は少なかったが、言葉には驚くほどの思慮深さが現われている。女らしいきれいな声で、ほとんどものを食べず、ワインもごくわずかしか口にしない。乗馬を楽しみ、立派な武具を喜び、気高い戦士たちの間にいるのを好んだが、夥しい会議や会合は嫌った。



この会見によってジャンヌはオルレアン奪還のために戦地に赴くことを許されたのである。今のシノン城塞は今では8世紀を経たせいもあってその多くが廃墟と化している。ここからの旧市街の眺めは素晴らしく、今でも往事のたたずまいを忍ばせる。ヴィエンヌ川の対岸のダントン河岸からの眺めは特に美しいので時間の経つのを忘れさせてくれる。それはスレート葺の屋根が連なる旧市街の統一感と裏側にそびえる城塞の荒々しい、荒寥とした様子が統一と解体というダイナミズムを見るものに与え、決して厭きさせない。ちなみにフランス人が一番昔懐かしい都市はというとこのシノンの街をあげている

のだそうであるそれは日本ではあまり知られていない。私たちは市庁舎に案内してもらったが、あいにく市長は急用ができて不在だった。そこでガイドの人は私たちをこの街のすみからすみまで案内してくれた。ワインのカーブにもいくつか連れていってくれ、その度に試飲と称して異なる銘柄のワインを飲ませてくれた。香り、色、味三拍子がそろっているかをチェックしろと言われるままに。一杯そして一杯。そのうちワインのアルコールのせいかな嗅覚も味覚も麻痺してきた。後は与えられたワインをただただ賞味するだけだった。これではたまったものではない、1時間あまりですっかり酔いが回ってしまった。そのうちに眠気がおそってきた。案内人は私たちをカーブの外に連れ出し、空気に触れさせてくれた。すると私達もワインの様に酸化してすっぱくなってきた。ともかく体内に力が入らない。体がぐにゃぐ



にゃだった。全くしまらない話である。私たちは酔い覚ましに川の畔へ行ってみることにした。空が曇ってきてあたりの雰囲気少し重々しく感じられるようになったせいもあるが、ヴィエンヌ川の流れは先ほど見た時より川の勢いが激しいように思われた。



まるで橋桁が今にも急流に呑み込まれてしまいそうに見えた。このショック療法が功を奏したせいかどうかは定かではないがいつしか睡魔はどこかへ去って行ってしまっていた。私たちは川の急流に添って下流の方へ歩いていった。やがて兩岸まで迫っていた丘陵がなだらかになってくると、視界がずっと広がっていった。当然のことだが川は兩岸の最低部に位置し、河畔はなだらかに高度を増してゆく。それがどこか特別に突起のように高くなっているのではなく、あるゆるやかなリズムにのっとりそれができている。その丘陵の傾斜を利用して葡萄畑ができている。葡萄の木は高さが1mにも満たなくて葡萄は一本に数房しかつけず、それが地上から離れていないこともあって、昼間の太陽熱を十分に吸収した。日昼日光をあびた畑の小石が夜間になると放射熱を発生し、葡萄の糖度を高めるのに役立っている。ワインを作るには糖度が一定より高いことが肝心で数千年以上の知恵が生かされている。ちなみに我が国のワインにはこの糖度が決定的に欠けている。そのために商品性を高めるためにいろいろな工夫の必要がなされていると聞く。



## アンボワーズ城のダヴィンチ

94年5月のパリは血の色に染まっていた。といってもあの68年の5月革命が再現したわけではない。街のいたるところに張られた映画のポスターが異様だった。イザベル・アジャーニーが真っ赤に血ぬられたドレスを着けて立っているのだ。映画のタイトルは『王妃マルゴ』（アレクサンドル・デュマ原作）でパトリス・シェローが監督したものだった。シェローといえば演劇やオペラの演出家としてフランスを代表する人物である。映画では何作か手掛けてはいるがあまり話題にならなかった。それでも映画に対する情熱は冷めず、今回の大作を完成させるに到ったのだからたいしたものである。世間の関心は相当なものだ。キオスクでは雑誌が全てこの映画の特集を組んでいた。テレビでもカンヌ映画祭に正式招待される作品のなかで特にこの作品を大きく取りあげていた。フランス中が応援する作品を無視するわけにはゆかず、私も映画館に足をはこぼせた。案の定、映画館の前は長蛇の列だった。メディアの勝利か、いきなり「パリスコープ誌」の映画ヒットパレードのトップに躍り上がった。映画の内容は通俗小説のそれである。王妃マルゴが母親のカトリーヌ・メディシスの計略にかかりナヴァル王に嫁ぐ、それはカトリックと新興勢力のプロテスタントの和解を意味したはずだった。ところが婚礼の夜に母親はプロテスタントの大虐殺を決行する。そのことを知



らされていなかったマルゴは累々たる屍のなかを逃げ惑い、やがて夫となったナヴァル王を助けることができた。それまで延々1時間かかる。殺戮の場面、死体を埋めるシーン、逃げてゆく群衆の姿がリアルに描かれる。カメラは『シンドラーのリスト』ほど冷たく突き放したりはしない。むしろ、『七人の侍』『用心棒』の様に画面全体にどこまでダイナミックな動きを取り込めるかという点に力点がある。意図的に娯楽的にできている。監督パトリック・シェローはこのシーンに今のボスニア・ヘルツゴビナの戦争とヨーロッパに忍び寄るファシズムの足音を重ね合わそうとしたのであろうが、結果は逆効果だった。アメリカの活劇と同じようにやたら娯楽的なだけだ。意味のないサービス精神。結果は無残。アナクロニズムに落ち込んでしまっている。画面が硬化しているのには別の理由もある。俳優の多くが演劇畑か



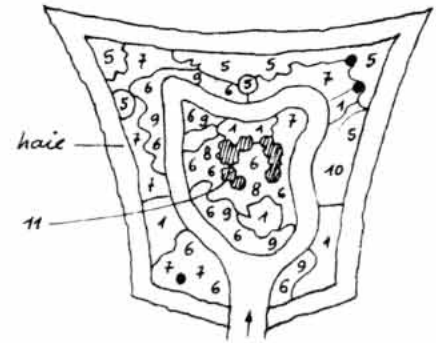
ら出ていたせいもあり、演技の流れが連続的、単調に傾斜している。舞台俳優同士は生理的に相手の動きを察知している。私たち観客もそのことを事前に察知してしまう。映画の俳優が演劇の役者と決定的に異なるのはこの点においてなのである。俳優は映画の全体の流れを察知する必要などさらさらなくて、監督が要求する各シーンを完璧に演じ切れればいいのである。俳優の能力はむしろこのインコグニト

をどのように自己演出できるかということにかかっているのだが、演劇の演出家シェローはこのことに気付いていないのだ。それにイザベル・アジャーニの演技力はこの淫蕩な王女を演じるにはあまりにも気取りすぎている。彼女の持っているプチブル性がデカダンスになり得ないのである。高身から下がるということがわかっていないのである。これでは官能は表現できまい。唯一救いがあるとすればダニエル・オートゥイユの演技だ。彼はナヴァール王の位置を社会的にも個人としても理解していた。彼がこの作品の芸術的水準を下支えしていたと言っても過言ではない。女性の運命を通して時代の運命をおしはかるという手法はフランス文化の特徴である。しかしこの作品に限って言えばそれは事大主義に終わってしまっている。こういったテーマでは何といてもトリフォーが秀でていた。シュローにはそういった資質が欠けているのだろうか。



カソリックとプロテスタントの争いといえはすぐに思いつくのがブロワとアンボワーズである。ある意味でロワール川の美しい城のイメージには似つかわしくない事件である。アンボワーズ城は1489

年に国王シャルル8世が大改築を決心し、1492年から5年間かかって城の主なる建造物が完成した。国王はあまりにも性急であったため、毎日数百人の職人たちが不眠不休で働いたといわれる。イタリア趣味の国王は家具や美術品、衣裳などをわざわざ運ばせた。それだけでなく、建築家や彫刻家、造園家などをイタリアから招いた。なかでも造園家のパチエロには城のテラスのなかにイタリア式装飾庭園を



つくるよう依頼した。このテラスからはロワール川の揺蕩う流れを見下ろすことができ、遠く霞むはるか遠くに広がる豊かなるソーニュ地方の大地が臨められる。ここに造成された庭園こそ今日のフランス式庭園の原型といわれるのである。1496年というのはフランス・ルネッサンスの始まりの年と言



われるがそれはまさにこのアンボワーズ城から始まったと言っても過言ではあるまい。今では建物の大半が取り壊され当時の偉容を賞ぶことはできない。それでもこの高台から眺められるスレート葺きの家々は当時の面影を十分に伝えている。

この工事がまだ完成していない1498年にシャルル8世は不慮の事故で急死してしまった。彼の後にこの城の主となったルイ12世はさらに城館の完成をめざし多額のお金を投入した。彼の時代には王宮はまだパリにあったわけではなく、プロワにあった。ルイ12世はこのアンボワーズに居を構えた。

そしてアンボワーズ城が最も華やかに輝くのは彼の後に王となったフランソワ1世の時代である。遂に彼は城館の工事を完成させた。芸術好みの彼はここに滞在する間に様々な祝宴を催し、そこに様々な能力をもった人々を起用した。なかでもレオナルド・ダ・ヴィンチは彼の招きで1516年から19年の最晩年をここで過ごしている。



ダ・ヴィンチはアンボワーズの近くのクロ・リュセーの館に滞在した。この城館は屋根がスレート葺きになっていてバラ色のレンガ造りで切石積みで縁どられた大きな窓があり、そこからロワール川の島を臨むことができる。この城館は小高い所にあるのでソーニュの森を眺めながらかつて若かりし時に過ごしたロンバルディア地方の田園風景を想いだしたのである。彼はイタリアから移り住んだ多くの職

人や芸術家たちと交流し、考えられる限りのことを行なおうとした。かつてイタリア人を驚かせたようにフランス人を驚かせた。羊の腸から作った風船を空に飛ばしたり、フランソワ1世の前で自動人形のライオン「マルゾッコ」を動かして見せた。蜥蜴の鱗に眼や角や髭をつけて飼い馴らし、人々にそれを見せて喜んだ。またウルビーノ公ロレンツォとマドレーヌ・ド・ラ・トゥールの婚礼の際にはクロ・リュセの館の中庭に紺碧の布を張り、そこに様々な星を型どった金をちりばめた。そしてその下で音楽劇を催したりした。また実践家であるダ・ヴィンチはこの地方の土質を良質化しようとして松を植えた。

ロワール川に沿ってリヨンまで運河を建設しようとした。城館もいままでにないような設計を行なった。考えられ得る限りの武器の設計、はてはトイレの原理まで考えた。画家であり観察者であるダ・ヴィンチはどんな残酷な場景も冷静に描いた。そしてそこに展開される人間の情念を見逃がさなかった。そのストーリーは一様ではなくいつもダイナミックである。彼にとって美とは静止しているものでは



なく常に変化するものであり、絶えず驚きをもって登場してくるものであった。天上的なものや地上の人間的な世界が混然一体となり、それまでにない知覚体験を可能にしてくれるのであった。それを生涯貫き通した人であった。彼が旅先まで持ち歩き生涯自分から手放すことのなかった絵画作品『岩窟の聖母』や『モナリザ』は彼にとって未完成作品だった。この点ではミケランジェロと正反対な芸術家的資質を示している。ダ・ヴィンチの生涯が外国で終わっのもこのような限界を越える思想に貫かれていることを証明している。イタリアからもたらされた新思想であるルネッサンスの精神はこうやってロワール川の岸辺の城館のなかでゆっくりと花開いてゆくわけであるが、それは長い中世の時代の終焉を意味していた。同時にこれらの城館が血で赤く染められ



る結果を招くことでもあった。この時代のフランスはある意味で時代の変化のなかで、矛盾を回避することができずに、まともにそれを引き受けざるを得なかったのである。結果的にはそれが確実に新時代の到来を約束するのであるが、そのために流された血の量と命の代償はあまりにも多い。芸術家や天才

たちはそのことに直接的に答を出そうとしない。彼らはその矛盾をそのまま自らの作品のなかに再現し、それを後世に伝える。後世のものたちは目を食い入るようにしてそれらの作品を眺めていても、今だに彼らから本当の教訓を学び取れずにいる。ダ・ヴィンチがこの地で生涯を閉じてから40年後にこのアンボワーズは新旧キリスト教の抗争の場として歴史に名を留めることとなる。この事件は裏切り者のスパイによって失敗に終わった。ユグノーの反乱者は捕らえられ、あらゆる手段で殺されたのだ。謀叛人のある者はバルコニーの狭間から吊されたり、四つ裂きの刑に処せられたりした。



## シュノンソウ城館の庭園

一般的に言ってヨーロッパでは都市と田園の分離は18世紀まではたえず繰り返し行なわれてきた。ロワール川周辺の流域でもオルレアン、トゥール、ボージャンシー、プロアなどは都市機能をたくわえていった。であるから都市のなかに自然を見出すことは困難なことであった。ところが財力を持っていた国王だけは例外である。彼らは城館のなかに庭園園を作り、イタリア人たちの優れた感性を取り込むことに成功した。豊かな人たちだけが限界を越える感性を持つことを許されたのである。歴史的な現実として起こりつつある新しい階級と貴族との対立は宗教戦争という様相を帯びてくる。都市は新たな要塞としてこの階級の人たちを支える。自然に対する親しみを持つ人たちの方が反動的な位置に立たされるという現実、同じ時期の日本と比較すると全く逆の現象ととらえられる。日本では都市は絶えず田園をそのなかに取り込むことに力を入れていたからである。ヨーロッパでは都市は物質力をそなえた自然であり、それを支配する人間に対して善をもたらすという考えが支配的になった。このことは今まで田園風景のなかでのんびり狩りをしてきた貴族階級にとっては存在そのものを否定されたことになる。美しいイタリア式庭園が血で染まるという矛盾したイメージはこうやって作られることなる。ここで確立されたイメージは1789年のフランス革命で頂



点に達し、19世紀後半まで続く。印象派の画家たちだけが都市のなかで非対象的な自然を想像することができたのである。

私は5月のある日シュノンソーの城館を訪れた。パリからはモンパルナス駅から出るTGVでツールまでゆきそこからはタクシーをチャーターしなければならない。タクシーの運転手はよくしゃべる。ガイドとしてこの地域の観光案内をしてくれるだけならいいのだが、どんなことでもしゃべるのだ。こちらにも嫌いではないので話題を投げ掛けるとすぐさま返事が返ってきた。最近では日本の景気が後退したせいもあって日本人の観光客はめっきり減ってきた。その代わりに韓国や台湾の観光客が増えたそうである。彼は政治的にはルベンが率いる国民戦線を支持しているという。今フランスが経済的に窮地に陥っているのは外国人労働者のせいである。彼らがいなくなればフランス国内の失業者も減るのだという。そのためには外国人に門戸を閉じるべきだと言う。だが観光客として外国人がフランスを訪れるのはいい。彼らはお客さんだからお金を落としていってくれる。なんとも自分勝手な国粹主義者なのである。つまり人の好きそうな顔をしてわずかばかりの金をちよろまかすごろつき(voyou)の論理なのである。それにしてもロワール川はフランスでも最大の観光地なのに交通の便が悪い。パリからは周遊バスか自分の車で来る以外に方法はない。城館から城館へ移



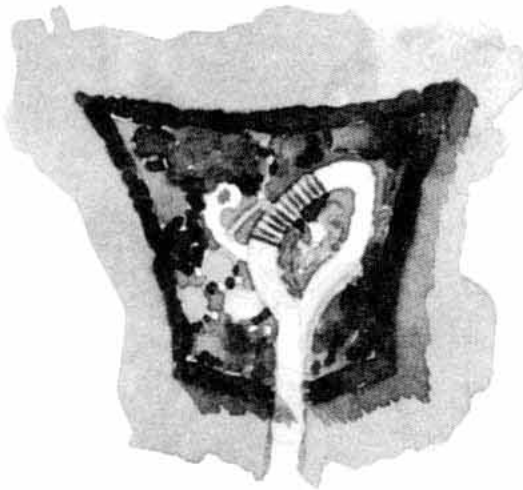
jeune pied  
d'Helianthus annuus

動するにはタクシー以外に考えられない。城館を訪れている間はタクシーに待ってもらわなければならない。ところが遠目には小さく見える城館も歩いてゆくとけっこう時間がかかる。城館だって外目からは小さくまとまって見えるが中に入ってみるとこれが結構広い。各部屋を隈無く見て歩くとすぐに時間がかかってしまう。一つの城館を見てタクシーまで戻ってみると1時間はかかる。つまり一口にロワール川と言ってもこの地域は縦150km横240kmもある広大な地域なのである。タクシーの運転手は待っている間なにをする風でもない。普段せっかちなフランス人もこういう時にはのんびりしている。



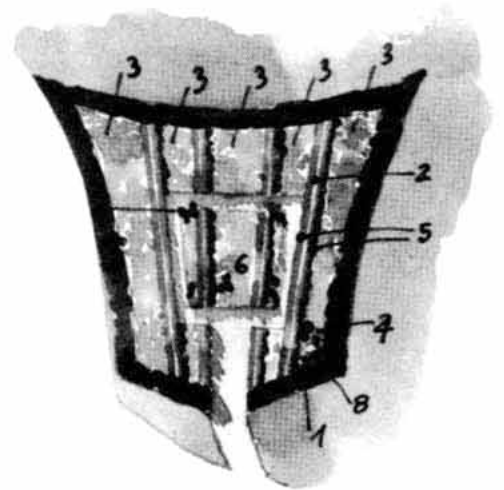
タクシーの駐車場から城まではプラタナスの並木道が通じている。道があまりにもきっちりと左右対象に切り開かれているせいだろうか、城館は以外にも小さく見えた。正直言ってこんな城がなぜ有名なのかと思われたくらいだ。並木道を数百メートル進むと右側に建築物が現われた。ドーム状になった建物

の入るとそこは蠟人形館になっていてこれまでの城館にゆかりのある人物が展示されている。この人形館の前はテラスになっていてちょっとした食事もできるようになっている。このテラスは濠に囲まれており左右に庭園がひらけている。左側の大きな庭園はディヤヌ・ド・ポワチエの庭園、右側の小さな庭園はカトリーヌ・ド・メディシスの庭園と呼ばれている。大きな庭園はアンリ2世が1547年に美



人の誉れ高いディヤヌ・ド・ポワチエに与えてから、彼女が経営の才を十分に発揮しこの城館に新しい魅力を付け加える事業の一つとして実現されたのである。農園の経営のみならず鐘をつくのにもお金を取ったというから、今の京都のお寺さんの先駆者と言えなくもない。この庭園はロワール川の支流のシェール川に沿って作られ回りは水路で囲われている。長方形で横160メートル縦100メートルになっている。水路に沿ってシェール川に向かって歩いてゆくと庭園は左側に見える。中央には真っすぐ通路が通っていて白い石炭質の小石が敷かれているその中央に清楚なたたずまいの円い花壇がある。整形式の庭園は様々な幾何学模様型に型取られている。

庭園があまりにも大きいせいか個々の花はあまり目立たない。確かにシェール川沿いを歩きながらこの庭園を眺めれば背景にあるプラタナスの新緑がこの庭園にいつまでも初々しさ与えていてとても400年以上も経っているとは思えない。それにシェール川のゆっくりとした流れがこの庭園に時を刻み続けてきたのである。しかし散歩者がここで道を引き返してしまったのでは庭園の快楽を極めることができないのである。視角の罨が仕掛けられているからである。散歩者は2度目の角を曲がってしばらく進んだ時はじめてそれに気づくのである。その驚きは目から生じる。頭が納得するのはしばらく経ってからである。この庭園の設計者はまさに散歩者がここまでやってくることを前提にして設計しているのである。快楽は容易には得られない。私たちはこの視角のパフォーマンスに自らも半分以上参加しないと獲得できないようになっているのである。庭園は背景にシュノンソーの城館を得た時今まで閉じていた華を全開するのである。今まで抽象的なままで留まっていた幾何学模様も具体性を帯び城館と一体化した整形美を完成させる。城館はこの幾何学模様のおかげでこのロワール川流域の静かな自然のうねりに呼応しあい、よりダイナミックな運動を繰り返しながら



時の経過に耐えているのである。散歩者は起点に戻るまでの道のりをそのようなことを考えさせられるのだ。なぜそれほどまでして自然を人工化したかったのか、それはヨーロッパではこの時期に一方で都市が自然とは分離した宇宙として確立してゆくのと対応している。当時の支配者は自然を困い込みすぎることによって都市と対抗したのである。しかし彼らが気づいていなかったのはそれが可能となったのも、その豊の源泉が農民たちの労働にあるということである。ディヤーヌが優れていたのはそれを庭園として形式化することに成功したことだ。都市とは異なる自然の宇宙を創造すること、これが徹底されることによって、一方で都市のなかに別の質の自然が生まれる契機となるのである。200年後にこの城館に滞在したルソーはここで『エミール』を書いたと言われるが、彼はこの庭園を見ながら何を考えていたのであろうか。



一方、右側のカトリーヌ・メディシスの庭園はあの有名なカトリーヌ・メディシスが長い間ディヤーヌ・ド・ポワチエの支配下におかれていたシュノンソー城館を夫であるアンリ2世の急死によって手に入れた際に作ったものである。この城館をこよなく愛したディヤーヌ・ド・ポワチエはこの城館とショ

一モン城館とを交換せざるを得なかった。してやったりはカトリーヌ・ド・メディシスである。長年の屈辱をここで晴らすことになる。こちらの庭園は60メートル四方で小じんまりとしていていかにも美しい城館のふさわしい庭園である。カトリーヌ・ド・メディシスはこの城館に一番ふさわしいものが何かということを知っていて、それを一番効果的に表現する仕方を知っていたのである。どうしても腑に落ちないのが、彼女がカソリックを大量殺戮したサン・バーテルミーの大虐殺の主謀者であるという点である。単なる非道な精神の持ち主であつたらこのシュノンソーの城館に対するこれほどのこだわりを持てたであろうか。彼女がディヤーヌを追い出してからシェール川にかかる城館を重層にしたり、付属の建築物を建てたり、かなり手を加えている。彼女なくして今日私たちが目にするシュノンソーの城館はないはずである。それを演出した彼女の能力は相当なものである。彼女は単なる誇大妄想狂ではない。川幅、城館の長さそれぞれが、100メートル位のものに対応したそれにふさわしい長さを考えると、それより少し短い幅の庭園がバランスがいい。



城館はかつてシェール川の上にまたがって建てられていた水車小屋の台座の上に建てられたのである。建物はフィリベール・ドロルムという建築家の手によって作られたが、古典的な簡素なたたずまいは川の流れの流麗さと対象をなし不思議なバランスを作っている。カトリーヌ・ド・メディシスはそれまで一層であったこの建物に二層を付け加え三階建てにしたのである。彼女はこの地に多くの貴族を集め華やかな祝宴を開いたという。彼女の後には義理の娘ルイズ・ド・ロレーヌがこの城館の主となったが彼女は夫のアンリ3世が暗殺されるとこの地に引きこもり、なんと11年の間亡き夫のために喪に服したという。彼女の死後は姪のフランソワーズ・ド・ロレーヌがこの城館を手に入れた。つまり華やかな歴史は幕を閉じることになる。



私は当初1時間ほどでこの城館と庭園の見学を終えるつもりでいた。タクシーの運転手にはそう言って待たせていたが、なんと2時間も経過してしまっ

た。ほんの一瞬のことのようには思えたのは、1つにはあまりにも空間がゆったりと取ってあるので、一見すると近くに見えたり、小さく見えるのだが実際にでかけてみたり、そばに行ってみるとこれが遠かったりとてつもなく大きいものなのだ。もう一つの理由は、歴史的な遺跡についてはいつもあることだが、それを鑑賞するにはどうしても想像力が関与す



る。訪問者は自分のなかでついつい想像力をたくましくして鑑賞しようとする、それがいつのまにか一人歩きし始め、自分もそのなかにすっぽり入り込んでしまう。やがて我に返ってみると思いもかけない時間が経過していることがある。

歩みを早めてタクシーの所へ戻ると、運転手は段取りよく車の向きを変えて行先の駅の方角を目指そうとしている。彼はちゃんと経過する時間のことは予想していたかのようにだった。楽しく見学できたかたずねてきた。私はまんまと彼の計略にかかったのだった。2時間の待ち賃と駅までの道のり代を入れると1000フランを越える、これはTGVで500キロ離れたアヴィニオンを往復する運賃に等しい。

よく考えれば彼が待っているという安心感があり、比較的のんびりと時間をかけての城館を隈無く見ることができたのだ。そう思えば彼に感謝しなくては、と思えてきたのだ。駅に戻った時にはすっかり暗くなっていた。TGVに乗るお金もなくなってしまったので、しかたなく鈍行列車で3時間以上かけてパリに戻った。



報 告

創造弾力の世界

荒 智子

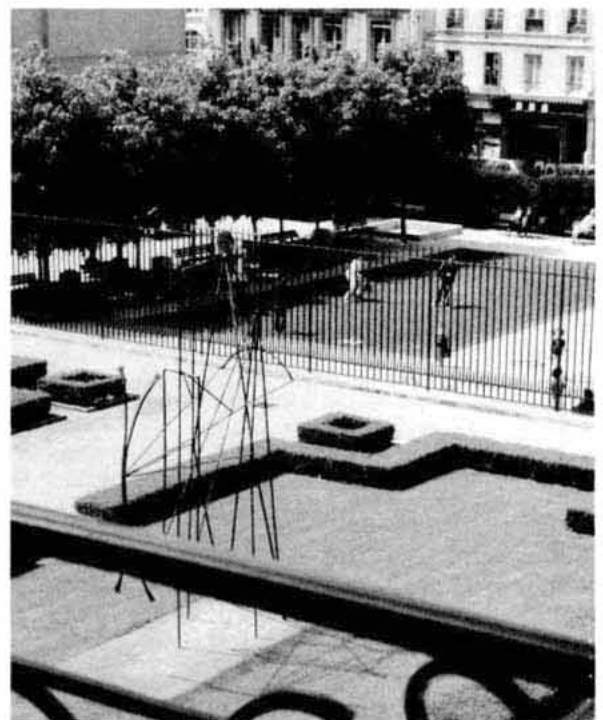
# パブロ・ピカソ



## オブジェと影

窓越しにフランス式庭園が見える。その中央には母子の姿にもおもえる像が勇壮とたっている。そのオブジェはまるで母親がそーっと手を差しのべて子供を掬い上げ、子供は両手両足を八の字に拡げてともうれしそうにしている様だ。母親の高さになり、そして空に限りなく飛んでゆけるような気分なのだろうか。実際にはそこに置かれた時からずっと静止したままでいるが、彼らの周りにはいつも生きものが取り巻いているのである。

庭園の緑に映し出されたオブジェの影は、あやとりで作られた幾何学模様のように、あの太陽がようやく移動する度に（そう見えるだけである）幾通りものデザインが、万華鏡の如く変化してゆく。



ワイヤーで作られたオブジェからは考えられないような影。一旦あるものに反射した光はその先に秘められた世界を映し出す。決して誰もつかめなく、侵食できない。しかし永遠に離脱することもできないのである。何だか人間の親子の関係にもにているように感じられ、そのオブジェと影が本当に動きだしそうに見えた。

5月のパリの街。建物の壁、窓ガラス、きちんと配列された木々の頭にほどよく降り注ぐ暖かな日差しが、街全体の空気を大きく揺らしていた。フェンスを隔てた向こう側の庭園には、手前のそれら（実際は静止しているのにあたかも動いているような）の光景に対し、子供たちが声をはりあげ芝生の中に遠慮なくどンドン入り込む。大人はベンチに座り目の前の元気な子供を眺めている。そんな昼下がりに私は椅子を並べて一日中のんびりしたくなった。

## 飛び出した彫刻

天上の高い通路を歩き突き当たりの右の扉を入ると、いくつかの彫刻が並んでいる。ピカソの作品とというより子供たちが試行錯誤してやっと作り上げたように見えた。

確かにブロンズで仕上がってはいるものの、そのベースは偶然見つけたものを集め作られていた。ストーブの蓋やケーキを焼く時の皿等、様々な金属物を使用し繋ぎ合わせ、本物よりもっと立体的で強調的な彫刻に作り出されている。しかし見れば見るほど奇々怪々で人の顔の中にカマキリの眼、首の部分はバロック調の正方形の板などでできている。比較的人物像に関しては、彫刻の各部分の素材が明らかに表面化されている気がした。

それに対してアサンブラージュの彫刻ではスクラップ置場の中から屑鉄や鉄片、缶詰の缶、ボール紙などの要素が全く原形を止めてなく石膏で繋ぎ合わされている。「縄跳びをする少女」（1950年）の作品はピカソが娘の縄跳びで跳んでいるところを空中に止めたい、という思いから表現したものでとてもやわらかく、可愛らしく描かれていた。彼の愛するものは次々にその時代とともに浮かび上がって残ってきたのである。



またブリキの板を用い切り抜いて色をつけた作品は昨今、ポスターやイラストなどで見覚えのあるように思える。たぶん現在のアーティストがこれらから手本にしている部分があるのだろう。ただそのブリキ板の切り抜き方は、日本の折紙を切り抜き広げると様々な模様や形に仕上がるものにちかい。しかしそうは思ったものの折り目は決して縦に入っているだけではない。湾曲していたり、左右対象でなかったりどの順番で折っていったのかさっぱり見当がつかないのである。当然のことであるけれどそう簡単に解明できない所がアーティストとそうでないものの違いであるのかなと感じざる負えなかった。



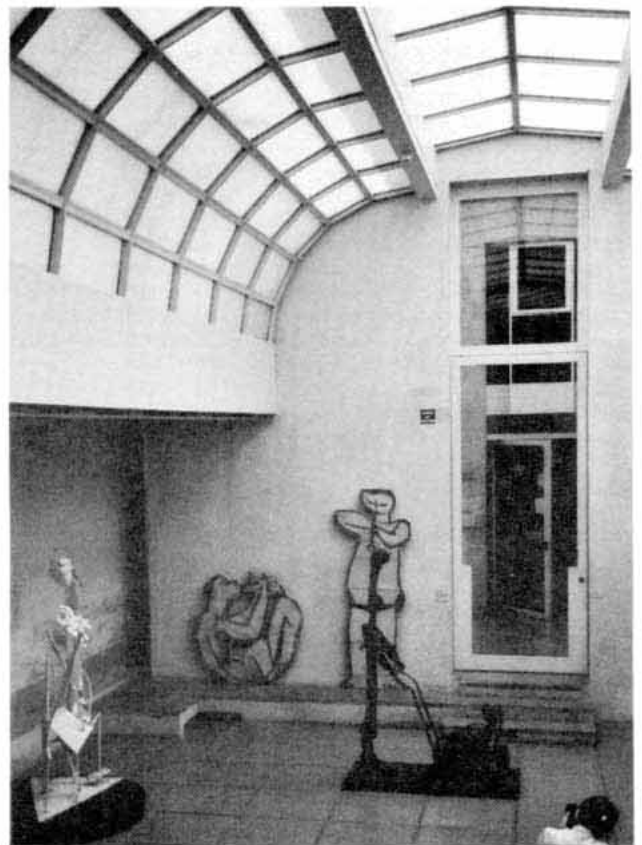
ピカソの彫刻と呼ばれる作品は絵画の世界から飛び出してきたようでとても愛嬌のあるものが多い。どれも特別な素材を使っているのではなく、日常の中で必要とされなくなったものや邪魔っ気にされたものを、今でいうリサイクル方式でアート作品に蘇えさせてしまう。

子供の視線で見る。ある一部分をクローズアップしてそこから自由な発想を生み出し全体へと導く。それは計り知れない想像の可能性を膨らましてゆくように思えた。

## 白の戯れ

天上の乳白色のガラス。ややアーチ型になっていて四角いガラスが規則正しく天上を覆っている。外からの光がそのガラスを通過して室内を白く浮き上がらせているのである。多少冷やっと感じるそのスペースは開放されていて、本物の作品に簡単に触れることができる。

普通的美術館であれば必ずといっていいほど鎖で作品を囲い、これより進入禁止といわんばかりに監視も厳重にされている。なのにここでは貼り紙ですら何の注意の提示がしていない。勿論大人も子供も大勢来館するけれど、誰一人悪戯にも作品にふれようとしない。しかしそんな風に考えることがきっと不謹慎なのか。とても羨ましいほどに、常に本物に出会える環境があるなかで自然に身につけている習慣なのだろう。



展示品は6点でいつの時代でもありうる姿を表現している。そこにおいては時間の距離を感じさせず、今生きていることの安心感も与えてくれている。正面にその空間を見るのと、空間のなかに入り周りを見渡すのでは歴然とその差がはっきりする。またその場所は美術館を3分の2ほど観終わったあたりで、少し休憩をとるにはちょうど良い地点に位置していた。

次々と人が入れかわり、高さ30センチメートルの平らなコンクリートに腰をかけてゆく。向かいのガラスのドアの奥のドアが開き人が来る。ドアとドアの間は約1.5メートル位あいている、その奥は反射され映画のワンシーンにも見えた。ピカソが舞踏に夢中になった頃手掛けた舞台装飾や衣裳がそこにオーバーラップする。天上の光線が照明になり、オブジェは舞台の美術、入れかわり来る人々はみんな役者やダンサーになりうるのである。「超現実（シュレエル）」という言葉がびったりくる空間の中で暫らく私もくつろいでいた。



ピカソは絵画、デッサン、彫刻、陶器、版画、舞台の衣裳そして造形表現から詩や芝居とあらゆるジャンルの芸術に関わっていた。その旺盛な創作力は今日私たちの中にも根強く残っている。小学生でもピカソといえば大概どのような画風なのかわかるだろうし、好き嫌いのはっきりするアーティストではないかと思う。ある一部の特徴的な彼の作品で、それが彼の全てだと言ってほしくない気がする。彼の作品一つ一つにその時代性、心情など目まぐるしい変貌が生み出され、そして思いのままに変化している。どの時点で創作していても常に純粋に、無限のエネルギーが漲る。あらゆる世代の壁を取り壊し新しい冒険に立ち向ってゆく勇気を与えてくれるのである。



## ルクサンプルクパーク

広大な敷地のルクサンプルクパークの中を通り、子供専用の広場へと向かう。多少、日比谷公園をおもわせるパーク内はきちんと整備されたブッシュに覆われている。いくつかの Kategorie があり、それぞれの世代や目的によって使い分けられるようになっている。

そのパークの中にやたらと置かれている椅子が気になった。これは自分たちが好きな場所まで持ち運び座るためだそう。しかしこれら椅子にもランクがあり、見栄えの良い座り心地がいろいろあるものはお金がかかるので、注意したい。きれいに植えられた並木道の一番奥に、木と木の隙間から教会が覗いている。画材道具を持ってきて絵を描く人、読書をしたり、買物に行く途中ここを通過したりとかなりの人々が行きかうのである。



木々の緑は艶やかに、風は体中にまとわりつき  
思わず眠くなった。どうも昔から春にはよわい。  
暖かい風と日差しが頭先从から爪先までリラックス  
させ、どこか遠くへと誘うのである。特に食後  
は極致である。



次第に騒がしい音が近くなってきた。キッチュ  
なカラーの子供のパークが見える。大入り満員の  
パーク内は大人も子供も一緒に遊んでいるが、入  
場料は子供の方が大人よりも倍近く高いのに驚い  
た。確かに子供がそこではメインで遊び道具を使  
うのだから、いちばん多く使用するものが支払う  
のは当然のことなのだろう。それに考えてみれば  
大人は基本的に子供が遊ぶのを見守っているだけ  
だから、それに高い料金を払うのはおかしい話で  
ある。



とは思ったものの日本ではあまりそのような話を聞いたことがないので、幼児教育の考え方の違いを感じた。

さて中に入ると歩いた瞬間、足元の感触が柔らかかった。地面一面に四角いゴムの板がぎっしりはめ込まれている。これは横転したりしてもケガをなるべく防ぐためなどだと思うが、私は砂利や土のままの方がよい気がした。ほとんどがアスファルトでできている街では土に触れることは少ないはずである。土にいる生物を発見したり、雨が降ればしみ込み泥になり、泥んこ玉を作る。水溜まりができるとその中にオモチャの船を浮かべてみたりすることもできる。そういう事はどうも望んではいないようだ。

このパークにある遊び道具はアスレチックの遊具が基本らしい。ピラミッド型のジャングルジム  
の止め金の上には、しっかりと厚手でのマットで  
覆われている。滑り台、綱渡り、登り棒など1つ  
遊具の中に数通りの連動したものが備わって、年  
齢別に大きさや、内容も異なっている。



パークの真ん中に不思議なデザインのものがある。それはシルバーで三角頭の水飲み場で、足元のまるいスイッチを踏めば水が出る。4箇所に栓がついていて、裸足でやってくる子供を見ると、なかなか親しみがもてるなと思った。

色の構成としては赤、青、黄の色がベースとなりあとは周りの自然に馴染む緑色や茶色である。一人で遊ぶもの、みんなと一緒に使うもの、順番に進まない最後までたどり着けないなど、自分

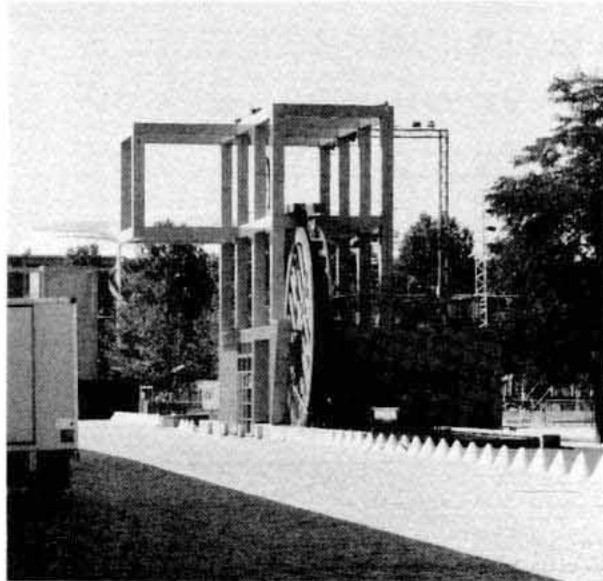
自信でしかやり遂げられないものや共同生活により学べるものなどと考えられているようである。

日本との違いはあまり見受けられなかったが、まだまだ子供にとっての遊び環境の工夫の余地はどこにおいてもあるのかも知れない。

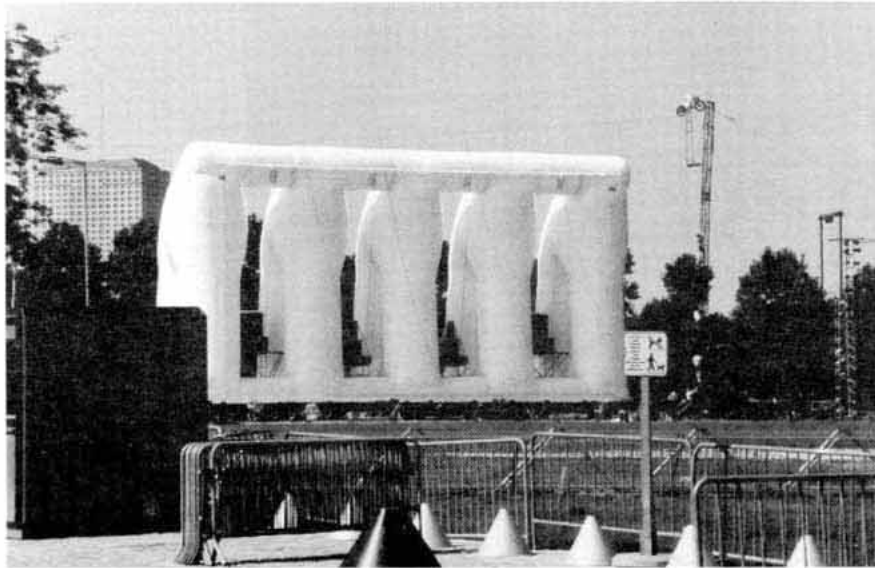
# ヴィレット

ここがヴィレットだと言われた入口付近は、工事中の箇所もあり美しくなかった。少し歩くと売店らしき建物がある。以前ここは屠殺場だったと聞いた。屠殺場のあとにできた公園なのだと思うたら動物の霊でもでるのかと気持ち悪くなった。

その建物の脇を歩いてゆくといきなり目の前に真っ赤なキューブが現われた。10m四方の立体は、水が張られらた水面に浮かんでいる。水車のようなものもありこの内部はどうなっているのか想像がつかなかった。

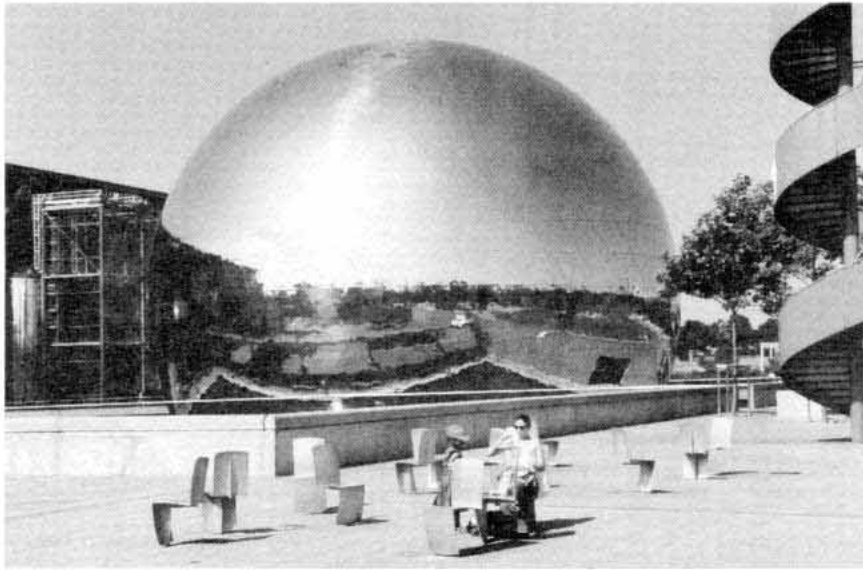


今度はその先に、真っ白な5本の太い柱でできた建物がそびえている。これはコンサートホールらしいがとにかく大きい。それに柱があんなにあっては使い勝手が悪そうにみえた。



また先へ進むと地平線にそって横に延びる橋があり、そこに行くにはかなり距離がありそうだ。左側からは白い煙が立ち上っている。近づくと3m四方のプールらしきものが、階段のように段差で4つ位連なりその奥より煙が発生している。子供はその中に向かってはしゃぎ回り、楽しんでいゝる。水着姿の人や私服などみんな思い思いの姿で芝生に横たわったりとして、パリの街でこんな光景が見れるとは考えられなかった。

橋まで来ると運河がある。真っ赤なフォリーに接した橋の上に立ち、景色を見渡すととてつもない広さに驚いた。確かポンピドゥーセンターの3倍くらいだそうだ。左前方に竜の形をした建造物がある。これは頭の部分が滑り台になっており、胴から尻尾にかけてはトンネルになっている。胴の部分の外側は、鉄でできた階段と滑り台で支えている。登ってみたがかなりの高さがあり、小さな子供には少し大変そうに思えた。



科学博物館にようやく辿り着くと、手前に金属よりなる球面体があるが、その側面に球体の回り360度の景色が反射している。元がどうなっているのか当然気になったので覗き込むと、水の張ってある池に入っていた。なぜかその球面体に引き込まれそう気分になり足早にその場を離れた。

渡り廊下を通り、博物館に入った。この頃には多少疲れていたが、今まで見てきたものとは別の雰囲気て心を躍らせてくれた。

ガラス張りの外観は内部に思いっきり光を集め、鏡のように反射しあう。年齢別に科学の体験ができるスペースがあり、水の動力やパソコン、コンピューターまたエレベーターのしくみがわかるように側面を透明にしてあるなどかなり充実したシステムである。



自然の中に点在する「フォリー」は無感覚さを与えるが、どこまでもつながる橋や広大な空間に突如現われる建造物、そして地表を流れる水など非常に変わった空間を作りだしている。子供たちにとってこの空間は未知の想像力を沸き立たせることであろう。

報 告

パーク・パノラマ

ジャン＝ポール・ピジャ

## 公共公園か個人庭園か

(私益か快楽か？新たな実践へむけて)

私は大変長い間現代の公園や庭園について興味を持ってきました。そして3、4年前に私たちはポンピドゥーセンターで展示会を行なうプロジェクトを計画していました。しかしこのプロジェクトは経済的理由で実現しませんでした。結果的にみればそれはよいことでした。というのは今日の庭園フェスティバルがここに実現したのはその時実現していなかったからです。ジャック・ラングは庭園の問題をあきらめるのは大変残念なことだと言って、ショーモンにそれを実現するように依頼してきました。パリでは所詮実現できなかったのです。

このプロジェクトのおかげで私は1年半の間ほとんど世界中を旅することができました。そこで10人ほどの環境デザイナーに会いました。そしてたくさん庭園を見てまいりました。これから私が説明申し上げることは私が見てきたことのレジメなどでは決してなく、最も本質的と思われることを指摘したいと思います。私は特徴があると思われる例を取りあげて見たいとおもいます。



## ＜第1のカテゴリー＞

過去と比べてみても庭園は今日その起源、国によってさほど差がなくなっていると言えます。数年前まではフランス式庭園、英国式庭園、イタリア式庭園などというように今日ではそれはもうなくなってしまいました。というのは一つには雑誌や本、テレビなどを通して情報がゆきわたり、様式が混交しているということが言えます。もう一つには植物学的な理由があります。つまりそれは植物の混合であります。一般の人ではとても知ることができなかった植物の起源は今日では特に知られるようになっております。実際均等化ではなくて豊富化が起きているのです。そして特に様式の大変大きな自由化が進行しています。

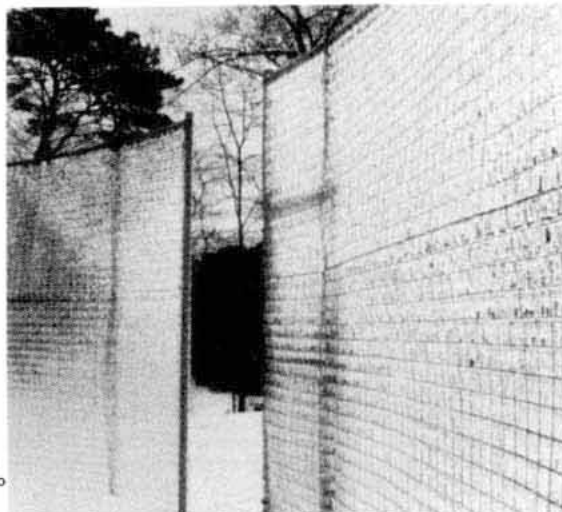
同時に、まだ多くの国では伝統にとらわれていることも明らかです。英国の庭園デザイナーはとりわけ19世紀末及び20世紀初頭からその伝統のとりこになっています。それはフランスにおいても同様に戦後何年もの間庭園デザイナーはグリーン空間の政治に大いに引き寄せられていました。反対に、この分野のことに特に積極的でクリエイティブな国もありました。例えばアメリカではある世代の庭園デザイナーたちは完全にクリエイションに関して私たちヨーロッパ人の基準から離れていると言えます。彼らは庭園の様式や理念をそれが単なるアイディアフラッシュであろうと少々おどけた敬意であろうと新しく生み出しているし、真に新しいヴィジョンをもたらしてくれています。

マルタ・シュワルツ：

彼はハーワードのテラスのために楽しい様式を試み  
みています。半分日本様式だったり、フランス式と  
イタリア式の混合だったりしてそれはもちろんアイ  
デアフラッシュの段階に留まります。それは全てが  
みんな人工的なものでできているわけではないので  
すが、発砲ポリスチレンでできています。なぜなら  
そのような場所で庭園を作ることは不可能だからで  
す。別の例を挙げると、ドーナツ型の庭園です。  
ヨーロッパではたとえアイデアフラッシュにせよ  
もちろんそんなことを考えてる人はいません。私た  
ちはまだ水を吐き出すカエルの段階に留まっている  
のでしょうか。

ミカエル・ヴァン・ファルケンブルグ：

彼はテュイレリー公園のデザイン公募に参加してい  
たのです。彼は組格子を金属で作り変えました。  
この組格子は冬には氷で覆われておりここを散歩す  
ると大変楽しい気持ちにさせてくれます。夏には小  
さな葦のある植物をはわすのです。これなどはアメ  
リカ人によるヨーロッパ的伝統の見直しであります。  
彼はそれを現代化していると言えましょう。



ロン・ウィニングトン：

彼の作品は大変コンセプチャルであります。彼は大変抽象的な庭園を作ります。岩礁、滝などカリフォルニアのどこにでも見出だされる感じに描いています。そしてしばしばイタリアの現代庭園にみられるような風景もあります。

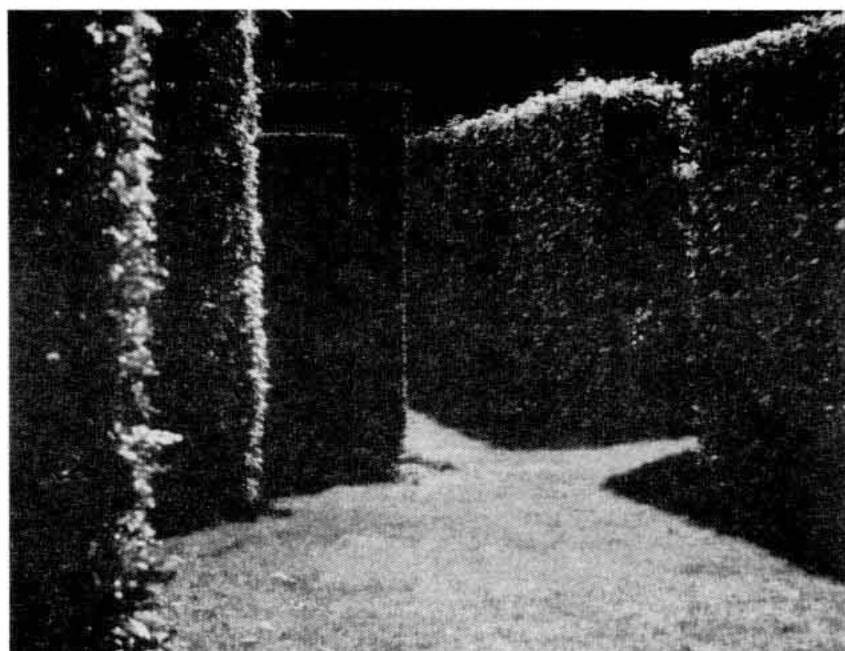
ハーグリーヴス：

彼は家の回りにブドウ畑に沿って庭園を作りました。つまり文化を歴史的意味に解釈するかわりに、彼は風景を観察し、それを庭園の形に再翻訳しようとするのです。



## ＜第2のカテゴリー＞

庭園が注文される対象は前と同じ所ではなくなつたのです。以前は庭園の注文は貴族の家とか、城館のまわりを対象としています。ここ50年位はアメリカと同様にヨーロッパでも個人の顧客は以前ほど庭園にお金を払わなくなりました。もちろんいくらかの例外的なケースがあります。ジャック・ヴィルツはベルギーで庭園に関してアマチュアの顧客を持つことになりました。この顧客はお金をたくさんかけるのです。注文は公的なプロジェクトに移りました。公的注文は取り扱いのむずかしい注文です。ルイス・ブラザは大変興味深い公的な庭園開発計画です。つまりそれはまわりの建物を忘れさせようとするための場といってもよいでしょう。それは庭園がわずらわしい環境を忘れさせようとするものでした。小林春人氏が手がけているようなリゾート地の開発計画などではその庭園のなかにある池に船が浮かんでいたりするようなものもあります。



### <第3カテゴリー>

公共の場所における庭園でも大変質の高いものもあり得ます、そして人々はそれを評価します。

ミッシェル・コラジュは少々プリミティブな作品を作ります。彼は現場から資材を回収しながら丘を作ります、そうしないとあまりにも高くつくからです。それから数年後、別の都市のプロジェクトで形が大変斬新で興味深い植物を選んでいる作品が目を引きました。ここに見出だされるのは、公共の場所及び人通りの多い所での作品はいちど決定されれば大変質の高いものになることができるということである。

ギイ・ラッシュが強調して言っているのですが「都市のなかに美しい庭園を作るのは無駄である。なぜなら人々がそれを破壊するからである。」と人々は言ってきましたが、それは真実ではないということです。別の種類の注文は都会の花壇であります。今日、19世紀に開かれた万博の時にみられたようなモザイク文化は少しずつ自由で面白い分野に進出してきています。それは特に花壇においてであります。しかも普段庭園など作れないような、大変人口が密集していて手を付けにくい地域であります。

それが今ではこれらの庭園は人々に完璧に親しまれています。この種の庭園は居住空間のごく近くにできる一連のコミュニティ庭園と呼ばれているものであります。この需要はかなり増加しております。需要は中心都市のものであり、体面維持のためのものであります。もはや都市は美しくあらねばならないというスローガン（カッコはいいがいささか古め



*Lavandula angustifolia*  
- Lavande officinale -

かしいものだ) はもっとひかえめな欲求に変わっている。それはもっと日常性に近づいたものであり、それを人々には尊重するようになります。プロワでは大きな広場が改築されました。メディチ家風広場とでも言えましょうか、それはルネッサンス庭園に対する賛辞が込められており、花とキャベツが混ぜられております。誰かキャベツを盗んだ時に私たちは少々道徳的に変身するのです。

#### <第4の 카테고리>

今日、都市のなかで庭園を作るということは計画的な政治を行なうことであります。そしてそれは庭園の社会的使用について反省を行なうことであります。バルセロナでは人々は庭園を装飾の単純な要素として考えることはもはやなく社会的機能の諸要素として考えます。

結果として人々には場所や人口の欲求に従ってそれを適応させます。つまりお互いに完全に異なっている庭園が現われたのです。ここにいたって第1の 카테고리と結びつくわけです。つまり唯一のスタイルはなくなり異なる場所に適合する自由なスタイルが生まれるということです。私たちがもし庭園を作りたいまたその本当の創造性を欲求すれば大多の成果が望めます。つまり大変大きな自由を手にする

ことができます。ガウディに対する賛辞と題した2、3ヘクタールの庭園はヴィラ・セシリアの個人別荘地に接している。ここはかなり強烈なインパクトを与えてくれる。ここは歴史的場所であると同時にデラックスな公共公園である。そこは貧しい人々が生活する場所である。別の例が、バルセロナにあります。それは石切り場だった所で、突然都市の中心部が変わってしまったチリダの彫刻が置かれた抽象的な庭園であります。

バルセロナでは、都市のなかに一種のマークポイントがあります。それはカタロニア銀行の建物で、10年もたった植物で覆われていて目立つ存在になっています。少しずつ都市は緑色に変わってゆきます。それは理想的な庭園だとはいえませんが少なくとも庭園を考える上で別の形態であると言えます。またそれは古い貧しい市街地にあります。そこには樹齢150年を経た木のある狭い場所を見出だせません。開発計画のせいでその木は倒されるはずでしたが、結局残されました。100カ所ほどの場所は大変ひかえめで、はでな所のほとんどない仕方で扱われてきました。

しかしそれは大変良い教訓になりました。なぜならこの場所は今日では完全に都市の住人によって手入れされているからです。



## バルセロナの最後の例：

コデルクというバルセロナの有名な建築家へのオマージュという形を取っている庭園です。バルセロナのハーレムとでも言った場所でコデルクは一種の大きな容器を考え出しそのなかに植物を植えるのです。ハーレムの問題は建物の下、そして建物と道の通路はいつも汚いことです。彼はそこにいきなり巨大な建造物を建てる代わりに一種の坂道をつける。

## <第5のカテゴリー>

都市のなかに庭園を作るとは同時に出会い、交換の場所を作ることでもあります。私たちはサビエール・マリスカルによって作られた小さなカフェを例にとることができます。この例は庭園とデザインの関係を考える上で興味深いのです。今日庭園の大きな問題は、目立つ舞台回りが無いということです。家具も、証明も、備品もないのです。ところがこのカフェには場所にふさわしい事物を創造する試みがなされています。



## <第6の 카테고리>

何年もの間、風景の仕事では質とプロフェッショナルリズムが欠如していました。庭園デザイナーの言葉は最低限なものに留まりました。今日では多くの人々が質の向上にむけて努力しています。その1つは複雑でよく選びぬかれた植物を選び出しているということです。もう1つは整備の概念の導入が行なわれています。平凡といえば平凡なことです。数年前にはなかった概念なのです。庭園デザイナーは発注があると新しい都市にグリーン空間を発送する、後はおしまい、それが新都市開発のビジネスだったのです。今日ではだんだん数年にわたる契約が彼らと交されます。それは仕事の質を向上させるのに欠かせないことだからです。

私たちはフランスのジャック・セガールによって実現された公園の質というテーマにかかわることができる。この公園は非常によくできたものであります。パリのデファンス地区の背後に実現された庭園でして、そこは庭園を作るのに最悪の場所でありました。以前はごみ捨て場に使われた土地でした。そして特にそれは通過地点にあり、そこを通る人々は整理するのがむずかしい人たちです。市当局は住民にただ痛つきやすい場所を除いて庭園を作ることを決めました。ジャック・セガールは植物学的に大変ソフィスティケートされた庭園を選びました。彼は庭園が大変高い質をもってあつかうのに足るものだと考えたフランスにおける最初の人でした。



## <第7のカテゴリー>

失われたノウハウを見出すことができる。そして職人、園芸家、庭園デザイナーなどを養成しなければいけない。今日庭園を造成している時でノウハウを失っていない唯一の国が日本であります。その理由は庭園造成の伝統が長いこと宗教的伝統に結びついているということから、石や木に触れたり、植樹の仕方や植物の選別の方法は大変進んでいます。私たちはその実現の方法の質の高さに関心します。このノウハウを学び取るためには、すでにこの分野で専門的に働いている人々のために、教育システムを確立しなければなりません。50、60才になった人でもこのノウハウを習得することはできましよう。もちろんその一部は過去のものとなり泉の設計家のように歴史的記憶から消失してしまったのもあります。それらは再びノウハウを再確認してゆけばよいわけですが。一方石工、園芸や植付け技術に関する全ての事柄を再活性化させその分野における質の向上を計ることができるはずですが。例えば、バルセロナではla caladeの現代的な転用がみられます。地中海地方、特にスペインではles caladesは人々がカラフルで幾何学的模様を組合せ、川の流れて回る小石であります。それを機械工場で小さな金属片でla caladeを再生産することができるようになりました。



## <第8のカテゴリー>

私たちは歴史的庭園について技術的、社会的有効性を見出すことができます。それらを実験的アトリエや庭園技術を学習する場所と変えることもできます。庭園の流行があるように歴史的庭園の見直しがあるのです。私たちは歴史的記念建造物に対しても同様な体験をしてきました。30年前はまだそれらに対する有効的価値を見出だせませんでした。唯一のアイデアはそこへ人々を呼び寄せることでした、つまりそれから別のことをするためにそれを利用するという事です。この考えはまだ一般化しておりませんが、少しずつ広まってゆくでしょう。

今日でも問題は同じです、庭園は動き、発展する対象であります。ですからシャンボール城のように取り扱うことはできません。

私は少々特殊な例を取り上げます。ニース市にある小さな城で「ヴィラガスト」という19世紀末に建てられた建造物ですが、今では市立図書館になっております。ここにすばらしい庭園があるのです。1970年に不動産業者の開発がハーレムのすぐ近くのこの城を取りまいてしまいました。しかし庭園はさわらなかつたのです。私がそれを最初に見た時には全くびっくりしてしまいました。そして私はこれはそんなに悪い考えではないなと思ったものでした。私たちがスペインの建築家ポーフィルの仕事を見た時、彼が「人民のためにベルサイユを」と言って人々がベルサイユに住んでいると錯覚するように建物を設計するのに対して「ヴィラガスト」は悪く



ないと思われました。というのはそうでなければ  
ニースの3分の2が破壊されたようにこわされてし  
まうからです。

今日ではもうそんなことは起こらないでしょう。  
もうちょっと控えめに進行されるでしょう。しかし  
この感受性をもって庭園が小さくつつましくなったり、  
保守的なあつかわれ方をするようにふるまうべき  
ではありません。今日再びこの場所に同じような  
状況が起こった場合この場所に適応した住居を考  
えるのは大変興味深いことであると思われま  
す。もちろんその開発を避けることができない  
ということが前提ではありますが・・・。

庭園、風景、私たちの環境に関する全ての創造は  
保守的でも否定的なことでもありません。反対にそ  
れは私たちを創造へ、新しい形式へと導くのです。  
そして私たちは今日の庭園デザイナーの登場によ  
って退屈な過去の形式や一種のノスタルジーに決別  
するのです。



## [写真・イラスト引用（出典）]

『あそび環境のデザイン』

仙田 満 著

鹿島出版会

『遊び場のデザイン』

アービッド・ベンソン 著 北原理雄 訳

鹿島出版会

『わくわくミュージアム（子どもの創造力を育む世界の86館）』

大月 浩子 著

婦人生活社

『Rencontres d'automne

— parcs, jardins, plaisir』

Festival international des Jardins

Chaumont sur Loire. 1993